

行 塚 遺 跡

—柏崎市・吉井遺跡群行塚遺跡第4次発掘調査報告—

1992

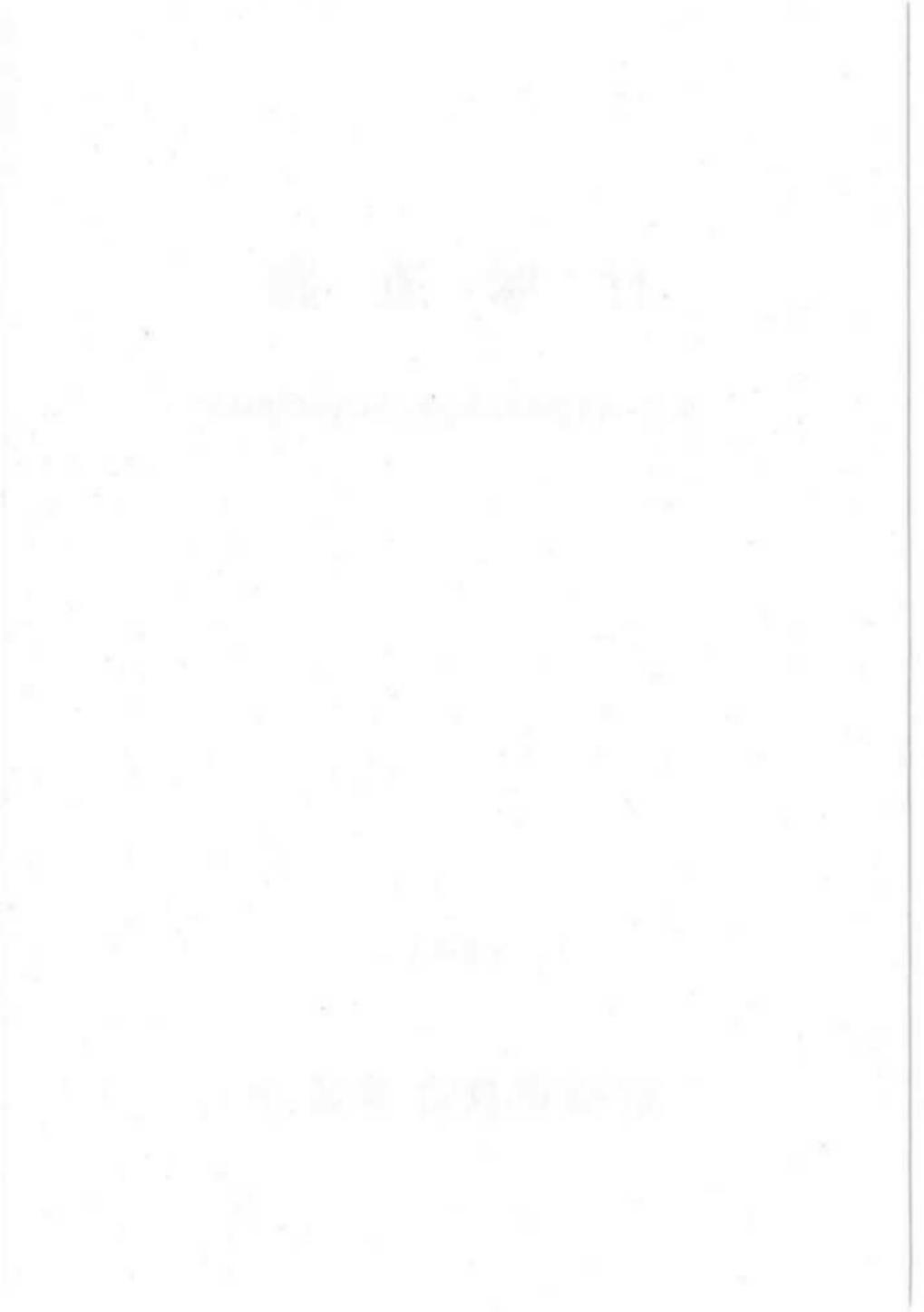
柏崎市教育委員会

行塚遺跡

——柏崎市・吉井遺跡群行塚遺跡第4次発掘調査報告——

1992

柏崎市教育委員会



序

柏崎平野東部に位置する中通地区は、市内でも有数な穀倉地帯である。それは、国道8号線が北部を横切っても、また西側に北陸自動車道がかすめても、田園風景の広がる静かな農村に、大きな変化は訪れていない。

中通地区的吉井地内に、数多くの遺跡が発見されたのは、今から30年ほど前に実施された圃場整備の工事によってであった。現在の遺跡数20カ所余りという数は、県内においてももっとも密集する遺跡群の一つとなる。この吉井遺跡群の調査は、昭和52~53年に実施された下谷地遺跡を手始めに、昭和56年頃からは土地改良等を原因に多くの遺跡が調査されている。そして、柏崎・刈羽地域で初めての古墳群の発見も、この吉井地区においてであった。吉井遺跡群は、それに含まれる遺跡の数とともに、その内容の豊かさは、県内でも誇れるものとなっている。

今回、ガスパイブラインの埋設に伴い、吉井遺跡群に属する行塚遺跡の調査を実施することとなった。調査面積は、たいへん狭く、その成果は当然限られたものとなる。しかし、後に行塚古墳群を抱える本遺跡は、古墳時代前期の玉造集落であり、今回の成果はそれを補強し、今後の検討にも、有意義な成果が得られている。また、平安時代にあっては、古代から中世に向かう社会の発展を端的に示す集落が営まれていたことを、あらためて確認することができた。

本書は、以上のような調査の結果をまとめたものである。ここで得られたささやかな成果は、一つの見解でもあり、今後さらに再検討が必要な事項も含まれているかも知れない。しかし、少しでも地域の歴史理解の一助となり、また遺跡保護のため活用されるとすれば、この上もなく幸いなことと思うのである。

最後に、発掘調査の作業に御協力をいただいた吉井地区の皆様並びに調査員各位、また調査の計画から実施に至るまで格別の御配慮をいただいた新潟県教育委員会並びに事業者各位に対し、ここに深甚なる謝意を表する次第である。

平成4年3月

柏崎市教育委員会

教育長 渡辺恒弘

例　　言

1. 本報告書は、新潟県柏崎市大字吉井地内に所在する行塚遺跡において実施した発掘調査の記録である。行塚遺跡においては、過去3次にわたってA～E地区までが調査されている。このため、今回の調査は、第4次調査とし、調査区名もF地区として設定した。
2. 発掘調査は、ガスパイプライン埋設事業にともない、石油資源開発(株)長岡鉱業所からの委託を柏崎市が受け、柏崎市教育委員会が主体となり実施した。
3. 発掘調査業務の現場作業は、社会教育課内遺跡調査室スタッフを調査員とし、吉井地区的有志の協力を得て、平成3年10月23日から11月6日まで実施した。また、出土遺物の整理作業及び報告書作成については、社会教育課遺跡調査室において実施した。
4. 発掘調査にともない出土した遺物は、「GT-F」を付し、各グリッド・遺構名・層序等を併記して注記した。また、これら発掘調査の出土品及び調査・整理の過程で作成した図面・記録類は、すべて一括して柏崎市教育委員会(社会教育課遺跡調査室)が保存・管理している。
5. 本報告書の執筆については、伊藤恒彦氏から玉頬の整理・分類・実測・トレース・挿図作成を併せ、第IV章第1節の2)・3)の2項の原稿執筆までを担当して頂いた。その他の挿図及び図版作成は、遺跡調査室のスタッフの協力を得て調査担当の品田高志が行い、前述以外の原稿の執筆及び編集も併せて行った。
6. なお、作成した挿図等の方位は、すべて真北である。磁北は真北から西偏約7度である。
7. 発掘調査から本書の作成まで、下記の方々から多大な御教示・御協力及び御指導を賜わった。記して厚く御礼を申し上げる次第である。(敬称略・五十音順)
岩間好彦・新田信郎・中通地区土地改良区・新潟県教育庁文化行政課

調　　査　　体　　制

調査主体 柏崎市教育委員会 教育長 山田恒義(平成3年10月まで)
渡辺恒弘(平成3年10月から)

総　括 霜田定利(社会教育課長)

管　理 石川　章(社会教育課長補佐)

　　花井憲雄(社会教育課副参事兼社会教育係長事務取扱い)

庶　務 阿部せつ子(社会教育課副参事兼庶務係長事務取扱い)

調査担当 品田高志(社会教育課社会教育係主査学芸員)

調　　査　　員 竹井　一(社会教育課嘱託)

　　帆刈敏子・大野博子・黒崎和子(遺跡調査室)

作　業　員 池田光男・池田善雄・伊部正十郎・佐藤市郎・下条耕平・新田睦種・

　　遠藤千代・押見トミ・押見米子・黒金イク・黒金静江・佐藤セツ・佐藤初子・

　　佐藤幸恵・下条茂乃・下条千恵子・下条ツヤ・吉田チイ子・吉田照子(五十音順)

整理作業 帆刈敏子・黒崎和子・牧野博美(遺跡調査室)

目 次

I 序 説	1
1 調査に至る経緯	1
2 発掘調査の経過	1
II 遺跡の位置と環境	2
1 自然的・地理的環境と遺跡の立地	2
2 吉井遺跡群と周辺の歴史的環境	2
III 遺跡と検出遺構	4
1 調査区の設定と層序	4
2 検出遺構の概略	6
1) 遺構の概略	6
2) 遺構各説	
IV 出土遺物	10
1 古墳時代前期の遺物	10
1) 土器類	10
2) 玉類及び玉造関連遺物	
3) 玉造関連遺物における若干のまとめ	
2 平安時代の遺物	21
1) 土師器	21
2) 須恵器	
V 総 括	24
1 古墳時代前期における行塚遺跡の意義	24
2 平安時代の行塚遺跡	25
引用・参考文献	26

図 版 目 次

- 図版1 a. F地区遠景 b. F地区近景
図版2 a. F地区トレンチ南半全景 b. F地区トレンチ北半全景
図版3 a. F-2~3グリッド遺構群 b. F-4~5グリッド遺構群
図版4 a. F-4~5グリッド遺構群 b. F-5グリッド遺構群
図版5 a. SK-43 b. F-1グリッド遺構群 c. SK-43 d. SD-42
e. SK-41・SKp-49
図版6 a~c. SK-40 d. F-3③~⑤遺構群 e. F-5②~④遺構群
f. SK-32 g. SX-48碧玉出土状況 h. SX-48
図版7 a. 前期古墳時代土器1 b. 前期古墳時代土器2
図版8 a. 玉造関連遺物1 b. 玉造関連遺物2
図版9 a. 玉造関連遺物3 b. 玉造関連遺物4 [SX-48]
図版10 a. 玉造関連遺物5 [SX-48] b. 玉造関連遺物6 [SK-43]
図版11 a. 玉造関連遺物7 [SK-40] b. 玉造関連遺物8
図版12 a. 平安時代土器1 b. 平安時代土器2

挿 図 目 次

- 第1図 吉井遺跡群と周辺の遺跡 3
第2図 行塚遺跡F地区と
トレンチの配置 5
第3図 基本層序柱状模式図 5
第4図 行塚遺跡F地区全体図 6
第5図 遺構断面図 8
第6図 遺構図 9
第7図 前期古墳時代土器 11
第8図 玉造関連遺物(素材①) 13
第9図 玉造関連遺物(素材①) 14
第10図 玉造関連遺物
(素材①・素材②) 15
第11図 玉造関連遺物(素材②・
未製品①・④) 17
第12図 玉造関連遺物(石核・
ビエス・エスキーネ) 18
第13図 玉造関連遺物(磨石+
敲石・碧玉材) 19
第14図 平安時代の土器類・砥石 23

表 目 次

- 行塚遺跡F地区遺構属性表 8

I 序 説

1. 調査に至る経緯

石油資源開発(株)は、中通地区の吉井鉱場を基地として井戸を掘削し、石油および天然ガスの採掘を行っている。市内曾地集落の東側沢奥には、天然ガスの採掘井戸、曾地B基地があり、吉井基地まではパイプラインにより連絡が計られている。今回、遺跡調査が必要とされたのは、ガスパイプラインの増設計画によるものである。当該事業は、すでに平成2年度から実施されており、昨年は北田遺跡を通過する計画であった。ただし、このルートはその後変更されて南側に迂回したため、調査には至らなかったものである。

平成3年6月13日、当該事業計画に係る遺跡取扱い協議がなされた。そのルートは、昨年度に引き続き、中通小学校付近から着手、行塚遺跡一戸口遺跡一西カ峰遺跡群を経て吉井基地へ至るものであった。当初、これを平成3年中に実施する予定であった。しかし、市教委としても年内中にすべて対応することは不可能であり、また遺跡の現状保存という観点から、ルート変更等の再検討がなされることとなった。その後、農地整備関連事業との重複部分が多いことから全ルートでの事業は断念され、ルート変更が困難な行塚遺跡分について、事業の一部がなされることとなった。なお、他の遺跡については、ルート変更がなされる予定である。

平成3年8月12日付けで、石油資源開発(株)長岡鉱業所から文化財保護法第57条の2の規定に基づく土木工事等の届出が提出された。市教委は、平成3年10月15日付けで文化財保護法第98条の2の発掘調査の通知を行い、10月21日から発掘調査に着手するため、準備に入った。

2. 発掘調査の経過

発掘調査は、平成3年10月21日からの予定であったが、別事業の終了がやや延び、10月23日から着手することになった。発掘作業は、調査費の経減のため、工事とのタイアップで実施することになっていた。このため、23日は現地にて工事関係者を交え、調査の具体的な打ち合わせ及び段取りを行ったが、掘削準備が調っていないことから、現場事務所の設営及び器材の搬入作業を行った。24日、重機により農道盛土及び表土の掘削を行う。発掘作業は、初日の25日が朝から激しい雨となり、午後からの開始となった。24日から29日までは、包含層の発掘及び遺構確認作業を行う。表土剥ぎ段階では、平安期の遺物のみ出土、碧玉等の玉作関連遺物を含む古墳時代前期の遺物は認められなかつたが、包含層の発掘では、これらが主体を占めることが明かとなった。遺構の発掘は、29日から31日まででおおむね終了したが、SK-43については11月2日まで行った。10月31日～11月1日には北半部、11月2日には南半部の全体清掃及び完掘写真を撮影、発掘作業を終了した。2日午後及び6日には全体の遺構及び調査区域の測量を行い、器材の撤収も終了し、11月6日までに現場作業のすべてを完了した。

II 遺跡の位置と環境

1. 自然的・地理的環境と遺跡の立地

行塚遺跡は、吉井遺跡群に含まれる遺跡の一つである。吉井遺跡群は、柏崎市街地から東8km程の吉井地区に所在し、1.5km四方に20カ所近い遺跡が知られている。遺跡群の時代は、縄文時代から中世・近世を経て、断続的ながら現在にまで至る。遺跡の立地をみると、縄文時代や中世・近世の山城跡及び塚(群)が丘陵部に分布し、弥生時代・古墳時代・古代・中世以降の集落及び水田跡など水稻農業関連の遺跡が沖積地一帯に広がっている。これら遺跡群が立地する環境は、東頸城丘陵の支丘、曾地丘陵が東側に横たわり、その裾部から別山川流域に至る西側には沖積地が形成され、更にその西方は荒浜砂丘を経て日本海に至る。遺跡群は、別山川左岸から丘陵部にかけて、密度を濃くして営まれていたものである。

当該地の微地形は、丘陵に多く切り込まれた大小の沢が、多量の土砂を沖積地に送り込み、小規模な扇状地等の微高地を丘陵裾部に形成している。弥生時代以降の集落跡などは、主にこのようなところに立地する。行塚遺跡は、柏崎市大字吉井字池の下864番地に所在し、遺跡群内ではもっとも北に位置する遺跡の一つで、曾地丘陵から細く長く突き出た支段先端を取り巻く沖積地に立地する。当該地は、吉井遺跡群本体とは、長崎池に連なる低地により分断されており、地形的には曾地扇状地の縁辺という環境にある。現地表面の標高は8~9m、遺物包含層は約1m程下に存在する。

2. 吉井遺跡群と周辺の歴史的環境

行塚遺跡は、今までに4次にわたる調査が実施された。今までの出土遺物が示す本遺跡の時代は、古墳時代前期と平安時代を主体としているため、この2時期についてまとめてみたい。

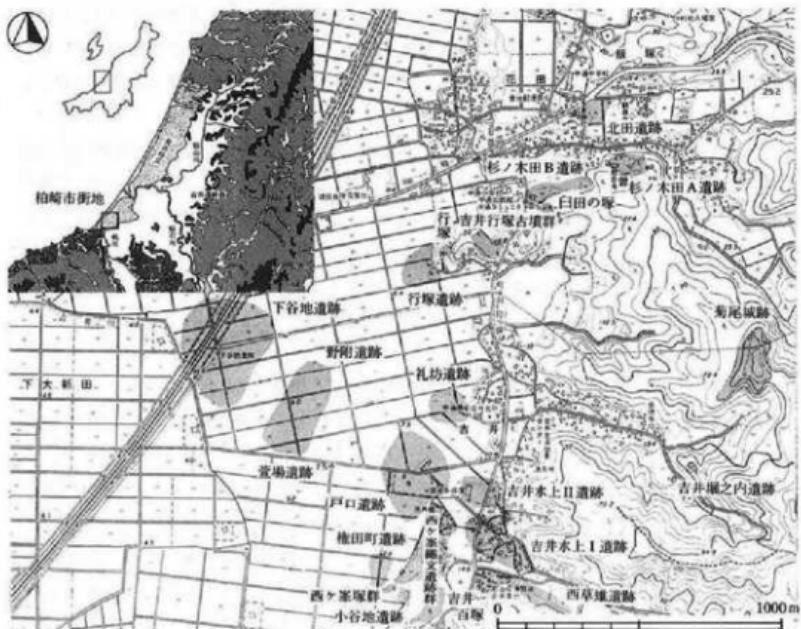
古墳時代前期 遺跡群内における当該期の遺跡は、行塚遺跡とその裏山に構築された行塚古墳群の2遺跡が確認されている。また、北部の曾地遺跡群を範囲に含めても北田遺跡を掲げられる程度であり、当該期の遺跡数が少ない状況をみることができる。古墳群との関係は、構築年代が不明であるが、前方後円墳の存在と地理的の関係からすれば、行塚遺跡を本体の第一に掲げることができる。それは、本遺跡が玉造集落であり、古墳築造との係わりを推定することができよう。また、北田遺跡でも碧玉が出土しており、行塚遺跡とは密接な関連が指摘できる。

遺跡数は、柏崎平野東部に広げても、海浜部では刈羽大平遺跡・高塩B遺跡が、また別山川流域では西谷遺跡が存在する程度であり、住居址等の居住を示す遺構も確認された事例はない。したがって、当該期を概観するには今のところ資料不足の状態であり、今後に期待される部分が多い。なお、幾つかの遺跡を掲げたが、これらの遺跡はほとんど前期でも前半期の遺跡であり、畿内的な傾向を強くする後半期の遺跡は今のところ未確認となっている。ここに、当該地

域における歴史的な背景があったのではないかと思われる。

平安時代 古代は、大きく前半期と後半期に区分が可能である。前半期は、律令体制の確立からそれが比較的機能した時期であり、後半期はそれが形骸化し新たな地域的な展開をみせる段階である。前半期は、おおむね奈良時代から平安時代前期頃（7世紀末～9世紀前半）に相当するが、その時代の遺跡は、吉井遺跡群内の戸口遺跡と宣場遺跡及び刈羽大平遺跡の製塩跡のみであり、柏崎平野一帯では少ないので現状である。

ところが、平安時代中頃以降（9世紀後半）の後半期に至ると、遺跡数は爆発的に多くなる。この現象は、越後における画期であるが、東日本全体における動向でもある。吉井遺跡群内でも、行塚遺跡のほか、吉井水上II遺跡・戸口遺跡・宣場遺跡・野附遺跡など多くを掲げることができる。行塚遺跡の場合、古墳時代前期の後、ほとんど廃絶していたが、9世紀後半に至って突然に集落が形成された訳で、当時における変革は大きかったと思われる。ただし、遺跡自体は小規模で、律令期の集住傾向が緩和され、散村化が進んだような状況、もしくは集落ではなく、開発の進展とともにその耕地に近い場所に、一つの田堵あるいは名主といった者たちが移り住んだ可能性も考えられる。現在のところ、これらは現象として把握されていても、その実態は解明されておらず、今後の研究に期待される部分が多い。



第1図 吉井遺跡群と周辺の遺跡

III 遺跡と検出遺構

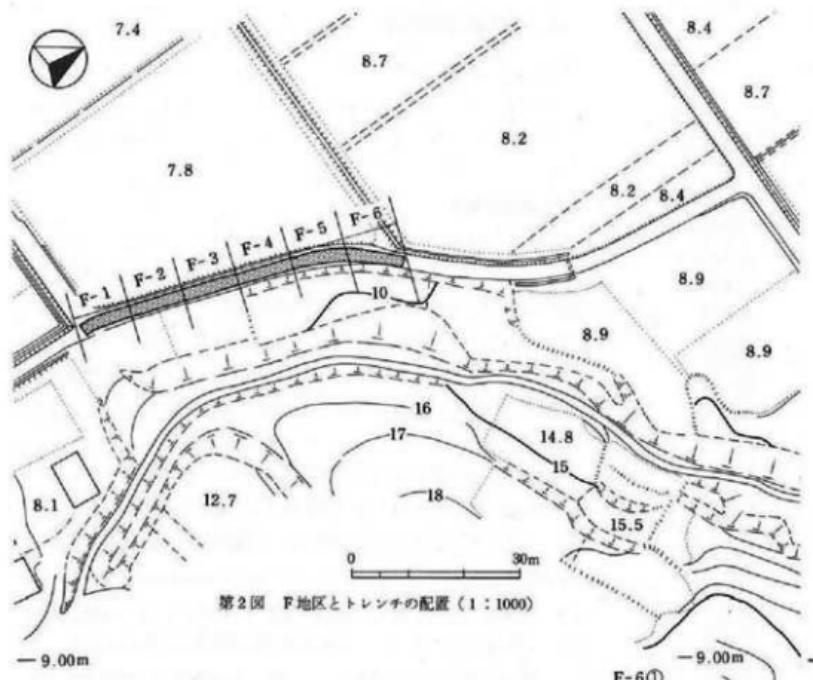
1. 調査区の設定と層序

調査区の設定と概要 本遺跡の調査は、過去に3次の調査をすでに実施しており、それらはA～E地区までの5地区として設定されている。これらは、すべてトレンチによる調査であり、今回も同様であることから、F地区と呼称することとした。

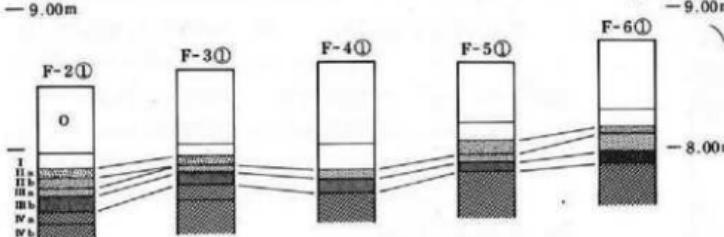
F地区的位置は、吉井行塚古墳群が築造されている尾根先端を巡る農道で、E・D地区の東部、C地区の北部に連続する。D・E地区では、その東半でかなり安定した地山粘土層を検出したが、遺構等は確認されていない。そもそもが、幅の狭いトレンチによるため、遺構に当たらなかつた可能性も強いが、遺跡範囲が東側の尾根付近に接する区域に限定されることが、ほぼ明かにされた。C地区は、F地区と同じく農道下の調査であった。水田部は、緩傾斜面に造成されており、昭和30年前後の圃場整備段階により、断切り状の擾乱を多く受けている。しかし、この農道下については、先ず最初に農道沿いの水田土砂を盛土用として盛り上げるという工法が取られたらしく、遺物包含層や旧地形が良好に保存されていた。C地区からは、古墳時代前期の玉造関連と考えられる遺構群、及び平安時代の建物址等の柱穴群が検出されている。F地区的状況は、正しくC地区的延長であり、ほぼ同じ時代の類似した性格の遺構群が存在していた。

F地区は、農道に沿ってガス管が埋設されること、調査区が工事の一環として掘削された部分を調査することから、グリッド等の設定も掘削範囲に合わせた。グリッドの設定は、C地区の北部に接する東西の農道との交点を起点とし、そこから北方向10m間隔で大グリッドとし、2m間隔で①～⑤の小グリッドとした。その呼称は、南側からF-1グリッド、F-2グリッドとしてF-6グリッドまで、また小グリッドも各グリッドの南から①②③④⑤とした。なお、基準線は、F地区で直線部の多い農道に沿い、その垂線によってトレンチを区分した。また、C地区との連続は考慮していない。

基本層序 F地区的基本層序は大きく4層に大別され、細別では都合7層に区分される。それについて土色等を示せば、第O層：農道盛土層、第I層：青灰色粘土層（旧耕作土）、第IIa層：暗青灰色粘土層、第IIb層：暗褐色粘土層、第IIIa層：黒褐色粘土層、第IIIb層：黒色粘土層、第IV層：明黄色褐色粘土層となる。遺物包含層は、第III層で、出土遺物の層位的な取り上げは行わなかったが、表土剥ぎ段階において包含層上面で掘削を止めたが、その時の出土遺物はほとんどが平安時代の土師器・須恵器であり、包含層の発掘作業によって古墳時代の遺物が出土したという調査状況からすれば、おおよその判断が可能である。つまり、平安時代の包含層は、第IIIa層からその上面、古墳時代前期は第IIIb層前後となる。第IIb層も、比較的暗色を呈しており、わずかながら出土している中世陶器の存在からすれば、中世以降の地表



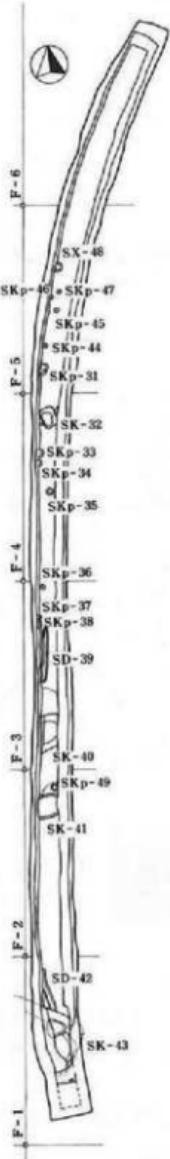
第2図 F地区とトレンチの配置 (1:1000)



第3図 基本層序柱状模式図 (1:40)

面と考えられる。第IV層は地山として把握した粘土層であり、本層は厚く50cm以上の堆積がある。各層序の広がりは、北部では第II層が薄くなり、特に第II a層は無くなる。遺物包含層とした第III層は、両層とも全域に分布する。

なお、第3次調査D・E地区〔柏崎市教委1990〕との層位的な比較は、第3次第III b層と今回の第III b層がほぼ対応、また第3次第III o層の暗灰色粘土層が、黒褐色を強くしたとすれば第III a層に対比が可能と思われる。地山層については、今回の第IV層が、前回の第VI層に相当するものと考えられる。



第4図
行塚遺跡F地区全体図
(1:300)

2. 検出遺構の概略

検出された遺構は、大型で住居址かと考えられる遺構1基、土坑3基、溝2本、柱穴等のピット15基、性格不明の土坑1基の計22基である。本項では、遺構全体の概要について述べた後、各遺構について記したい。

1) 遺構の概略

F地区から検出された遺構群は、F-1～5グリッドまでに分布するが、F-6グリッドでは地山面の還元性がやや強くなり、不安定な状況が看取されることもある。しかし、遺構は検出されていない。分布状況は、F-1、F-2⑤～F-3、F-4③～F-5④という3地点でのまとまりが認められる。しかし、この3グループが各自独立した遺構群として把握されるものであるのか、あるいはその意味などは不明な点が多い。

出土遺物によりある程度の時期を知ることのできる遺構は、そのナンバーを提示すれば、31・32・35～38・40～43・44・45・49の13基である。これらから出土した土器類は、一部細片のため識別が困難な土器もあるが、須恵器を含まず、そのほとんどが古墳時代前期のいわゆる古式土師器と考えられる。また、SX-48からは、やや粗雑な碧玉材が一括で出土しており、これも古墳時代前期の所産とみられる。これらの遺構が分辺する範囲は、今回調査したF地区の全域に認められることから、検出された遺構のほとんどは、古墳時代前期に所属する可能性が高い。また平安時代の遺物は、主にF地区でも南側に多く、その主体は本地区よりもC地区周辺にあった可能性が考えられる。しかし、平安時代の遺構内にそれ以前の遺物が混入する可能性は充分にあり、単純に遺構の時期を認定することは危険であり、特に細片の場合には注意する必要がある。

また、遺構の性格等についても、詳にできる事例はほとんどない。それは、調査区の幅が狭く、柱穴の連繋を追うことができないこと、および遺構を全掘できなかったことなどによる。これらについては、以下の遺構各説において若干述べることとした。

2) 遺構各説

本項では、遺構の性格及びその所属時期等を含め、若干の検討を加えながら各遺構について述べたい。なお、各遺構の記載は、個別ではやや繁雑であるため、種別によりたい。また、規模・形態及び出土遺

物の概要等については、表に括したので参照されたい。

土坑(SK) ここでは、柱穴ではなく、やや大形の落ち込みでいわゆる土坑とされる穴について概観する。大形の土坑としては、SK-43があり、その他ではSK-32・40・41の合計4基が対象となる。

SK-43は、F-1②③グリッドにおいて検出された大形の落ち込みで、その一部をようやく調査したものである。覆土の上層は、平安時代の包含層に覆われ、出土した遺物には古式土師器のほか碧玉片が多い。規模及び平面形については不明であるが、底面は土坑状の掘り込み以外おおむね平坦であり、また発掘部分がコーナーと考えられることから、堅穴住居址の可能性が高い。本址には、SD-42が北接するが、ここからの出土遺物も古式土師器であり、同時期の所産と考えられる。碧玉材は、明かに玉作に係わるものであり、したがって本址の性格及び付属する溝も玉作の工房に係わる可能性が高いであろう。時期は、古墳時代前期前半期でも後半と考えられる。

SK-40とSK-32は、規模に差異があるが類似した形態を呈した長方形土坑である。深度も概して深いことも共通している。遺物は、古式土師器及び碧玉材であり、時期的には上述のSK-43と同じである。これら2基の土坑からは、これらの性格について示すような遺物は他になく、不明とせざるを得ない。ただ、形態上は土壤墓等の墓址である可能性もある。なお、SK-32には、東西の両側に溝状に連続する遺構が存在しており、本址の性格等に係わるものとして注意が必要であろう。

SK-41については、遺物が若干出土しているが、深度が浅く、地形的な窪みの可能性があり、単なる包含層の堆積とも考えられる。

溝(SD) SD-39・SD-42の2本が検出されている。SD-42については、SK-43に付属し、玉作の工房に係わる遺構の可能性がある。両溝の特徴は、覆土に砂分が多く含まれていたことである。SD-42については、玉作工房との係わりによるものとも思われ、同様にSD-39を考えれば、SK-40との係わりで工房関連の遺構とみなすことができる。しかし、SD-39については、SKp-36とSKp-38もしくはSKp-37が柱穴であり、何らかの建物址が存在したとすれば、その雨落ち溝の可能性もあり、にわかに断定しかねるものである。

ピット(SKp) いわゆる柱穴と考えられる小穴であるが、調査区の幅が狭く、その並び等による確認はできない。ピットは、概して浅いものが多く、ある程度の深度が取れているものは、SKp-36~38の3基と、SKp-44・45の2基である。ピット15基ほどの中でも、柱穴の可能性が高いのは、これら5基のみである。これらが、建物址あるいは柵列などの柱穴としてその組合せを考えることは、躊躇せざるを得ないところもあるが、ひとまず積極的に推定し、今後の課題として提示しておきたい。

まず第一に想定されるのは、SKp-45と44の関係である。両者の距離は、互いの中心から2.0mである。45の北側にピットが存在しないところから、SKp-45を北東隅の柱とした建物が存在した可能性が高いのではないだろうか。これらの時期については、出土土器類が少なく

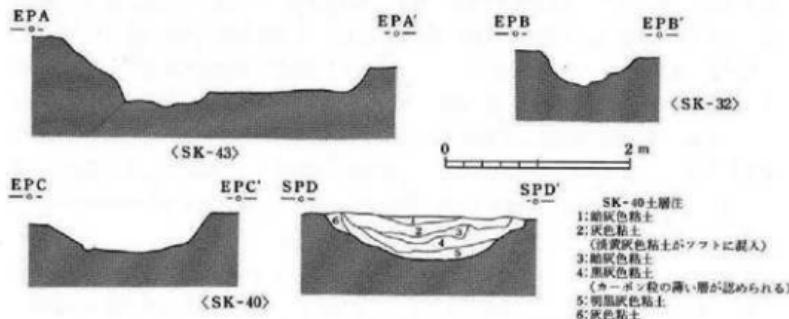
細片であることから確定できないが、古墳時代前期というよりも平安時代もしくは中世以降とした方が妥当かも知れない。

もう一つの組合せは、① SKP-36と38、もしくは② 36と37であり、SKP-35もこれらの延長線上にあることから何らかの係わりが想定できる。①の間隔は2.06m、②は1.64mであり、後者はやや狭過ぎるのかも知れない。したがって、ここでは①の組合せによる建物址を想定したい。規模は、SKP-35までは至らず、上述の建物址と同規模で、2間×3間程度と考えたい。時期の推定もほぼ同じと思われる。

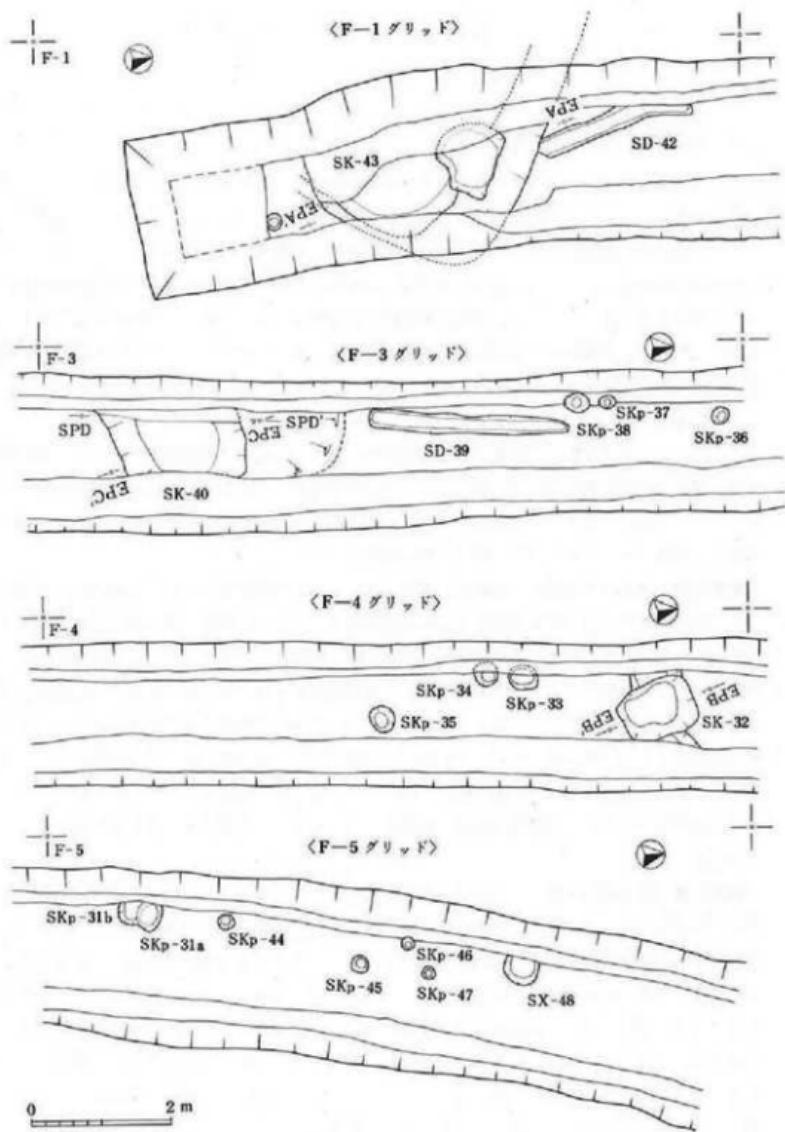
その他の土坑(SX) ここでは、SX-48について述べる。本址は、F-5④グリッドから検出され、遺構分布ではもっとも北側に位置する。平面形はほぼ円形を呈する浅い窪み状の遺構である。壁は不明瞭であり、意図的な掘り込みによるものかは断定できない。本土坑の特徴は、碧玉状の石材が多量に出土した点にある。この石材を碧玉とすれば、かなり粗悪な物であり、玉作の原材料を保管したというより一括廃棄したような状況を呈している。時期については、土器類を伴わないことから明確でないが、おおむね古墳時代前期の所産と思われる。

行塚遺跡F地区遺構属性表

遺構名	種別	位置	平面形	規模(cm)	深度(cm)	遺物	時期	備考
SKP-31a	ピット	F-5	円形	36×46	14.0	古式土師器・碧玉	古墳時代前期?	
SKP-31b	ピット	F-5	円形	40×40	11.0	古式土師器・碧玉	古墳時代前期?	
SK-32	土坑	F-4	長方形	105×80	40.5	古式土師器・碧玉	古墳時代前期	
SKP-33	ピット	F-4	梢円形	40×—	12.0			
SKP-34	ピット	F-4	円形	34×—	7.5			
SKP-35	ピット	F-4	円形	37×36	14.0	土器細片	平安時代以降?	
SKP-36	ピット	F-3	円形	23×24	25.0	古式土師器細片	平安時代以降?	
SKP-37	ピット	F-3	円形	24×17	32.5	古式土師器細片・碧玉	平安時代以降?	
SKP-38	ピット	F-3	円形	35×26	24.5	古式土師器	平安時代以降?	
SD-39	溝	F-3	—	27×—	7.0			
SK-40	土坑	F-3	長方形	176×—	43.5	古式土師器・碧玉	古墳時代前期	
SK-41	土坑	F-2	梢円形	132×—	6.5	古式土師器	古墳時代前期	
SD-42	溝	F-1	—	27×—	11.0	古式土師器	古墳時代前期	
SK-43	住居址	F-1	方形?	230以上×270以上	48.0	古式土師器・碧玉	古墳時代前期	
付属土坑	土坑	—	不整形	85×—	19.0			
SKP-44	ピット	F-5	円形	24×23	28.0	古式土師器細片	平安時代以降	
SKP-45	ピット	F-5	円形	24×24	48.0	古式土師器細片	平安時代以降	
SKP-46	ピット	F-5	円形	19×17	15.0			
SKP-47	ピット	F-5	円形	20×18	18.0			
SX-48	土坑状	F-5	円形	48×—	6.0	碧玉素材	古墳時代前期	
SKP-49	ピット	F-2	円形	32×31	9.5	古式土師器	古墳時代前期	



第5図 行塚遺跡F地区遺構断面図(1:60)



第6図 行塚遺跡F地区遺構図(1:80)

IV 出土遺物

1. 古墳時代前期の遺物

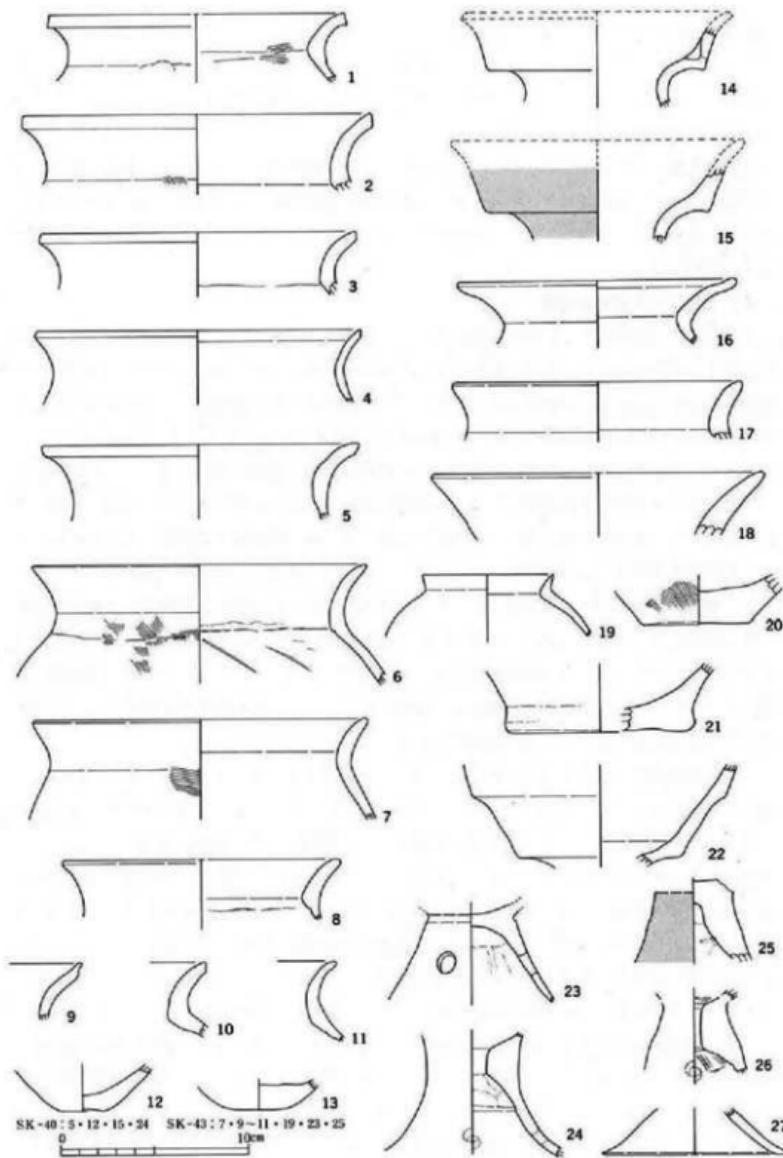
古墳時代前期の遺物は、いわゆる古式土師器を主体とした土器類と、碧玉材を使用した玉作関連遺物及びそれらに係わると思われる石器類がある。本節では両者に大きく分けて概略を記したい。当該期の遺物は、層位として平安時代の遺物と分離できたものではない。しかし、その出土状況は前述したように、表土剥ぎ段階にはほとんど出土せず、その後の包含層の発掘において出土をみていることから、両者は層位的には分離されるべきものと判断される。なお、遺物については、遺構内からの出土もあるが、ややまとまりに欠けるため一括して述べ、遺構別については挿図中に記載した。

1) 土器類

土器類は、いわゆる古式土師器である。器種は、甕・壺・高壺・器台が認められる。現存状況は、地層の関係か概して残りが良くなく、磨滅等が著しく調整痕等が不明瞭な個体が多い。また、小さな破片が大半で、器形の全体をうかがえるものではなく、今回は主に口縁部を中心に図化し、概観することとしたい。以下、器種別に述べる。

甕形土器（第6図1～13） 甕類は、すべて「く」の字口縁を呈するものに限られ、有段の二重口縁についてもあっても極めて少ない状態と考えられる。口縁部、特に口唇部の形態から4類程度に分類が可能である。1は、口唇部を明瞭に面取りがなされるもの、2～5・10は、面取りがやや不明瞭であるが、先端が尖るような形態を呈する。6～8・11は、口唇部が丸く、やや尖り気味のものも今回の一括しておく。9については、口唇部が小さな段をなし、二重口縁の形態化もしくは異系統の形態と思われるが明確でない。底部は、2～3cm程と小さい。調整は、口縁部内外面が横ナデ、体部は内外面はハケ調整とおもわれる。ただし、6についてはヘラ削りが施されている可能性がある。色調は、主ににぶい橙色であり、若干変化はあってもその前後である。

壺形土器（第6図14～21） 口縁部を主体に述べると、その形態は有段の二重口縁壺・広口壺及び短頸壺に区分される。二重口縁壺（14・15）は、頸部からかなり強く外反し、有段部を経て外反した口縁部が付く。頸部は、筒形をなさず、これらは北陸系の壺と考えられる。15には、外面に赤彩が認められる。16は口縁部がくの字に強く屈曲しており、形態的にはやや特殊な観があり、甕類に近い。調整等もやや粗雑である。17は口縁部が短く緩く外反するもので、出土状況及び胎土から21がその底部と思われる。18は、胎土が概して良好で厚く、調整がやや粗雑でもあり、脚部口縁の可能性が残されている。以上の底部は、底径が5～10cmと安定しており、甕類と対照的である。胎土は、精選され、やや重さを感じる粘土が使用されるが、2mm程の砂粒を多く混入させている。19は、小形の短頸壺で、球胴形と思われる。



第7圖 行塚遺跡F地区前期古墳時代土器 (1 : 3)

高坏形土器（第6図23・24） 固化した2点はともに脚部で、坏部の形態は不明である。两者とも3つの穴が穿たれる。23は、かなり精良な胎土で、坏底部及び脚部天井部の調整は、磨きがかなり丁寧になされている。24はやや粗雑なもので、磨滅も著しい。坏底部が抜けているため器台の可能性もある。

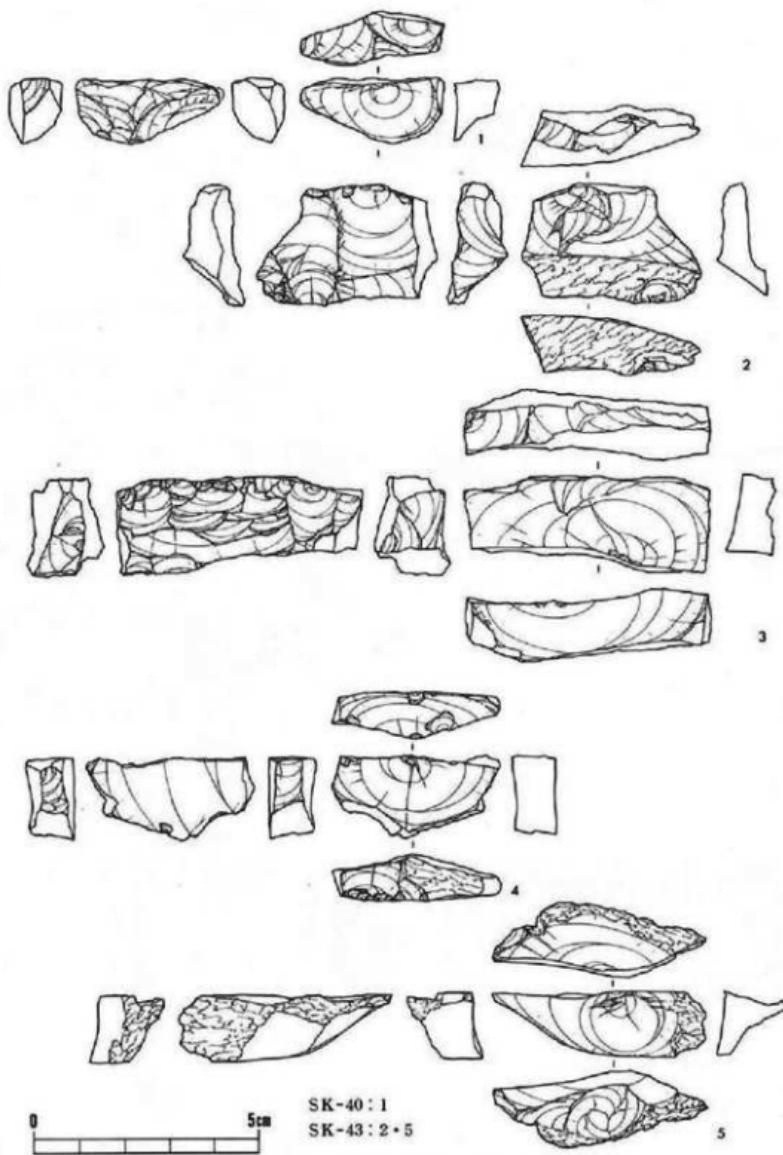
器台形土器（第6図22・25～27） 22については、装飾器台の受部と思われるが、壺口縁部の可能性もある。有段部が2段認められる。25・26は小形器台で、前者には赤彩がなされる。27も小形器台脚下半と思われる。27は細かな砂粒が多く含まれるが、その他の2個体は壺類の胎土に類似する。

2) 玉類及び玉造関連遺物

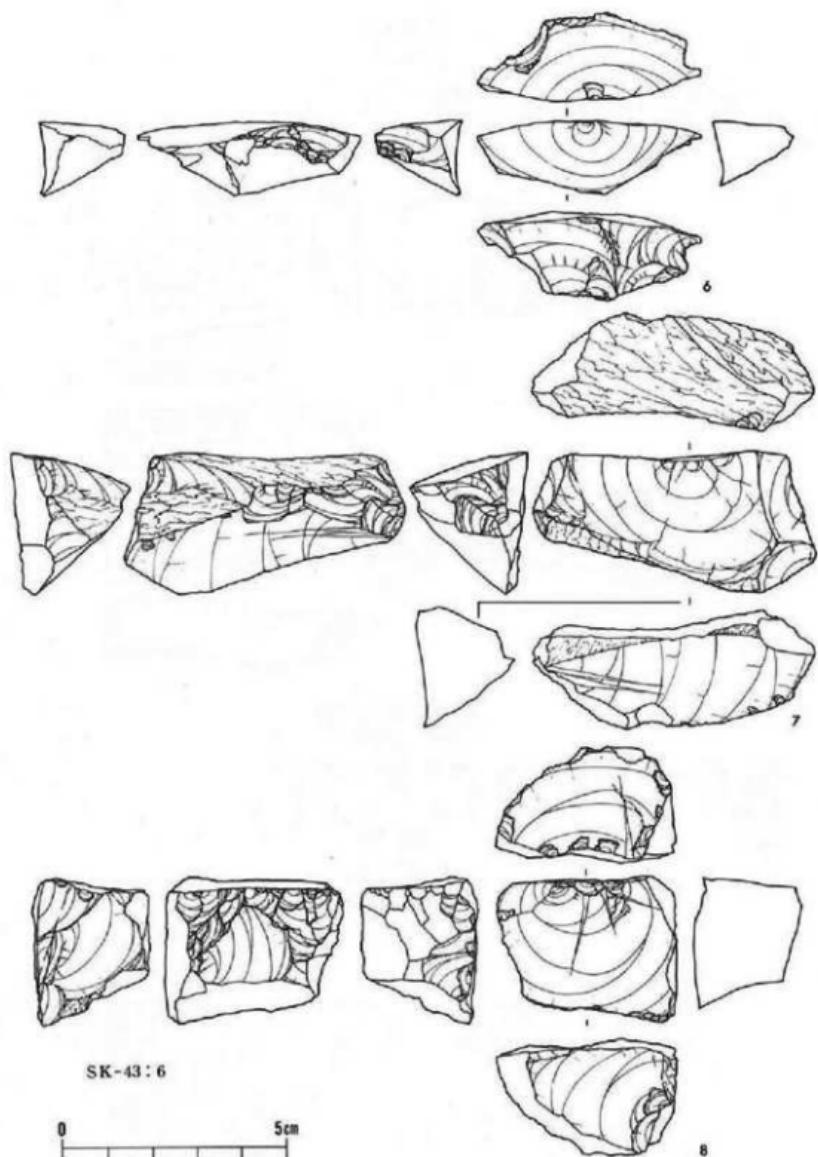
本遺跡は、昭和59年に行われた第2次調査で、資料的には少なかったものの管玉等の玉類製作に関する資料が出土し、管玉の製作工程の概略を捉えることができたことから、本遺跡が玉類の生産遺跡であることが推定されている。第4次調査となる今回の調査でも、碧玉を中心とする278点の玉造関係の資料が検出され、前回の資料に若干の補足をすることが可能となった。ここでは、今回確認された資料を報告するが、資料の指事は前回の報告に準じた〔伊藤1985〕。また、これらの資料は遺物包含層である第III層～第IV層上部にかけて出土し、土坑のSK-32・40やピットのSKp-37、浅いくぼみ状の遺構SX-48、住居址等遺構の一部とみられるSK-43等の覆土中からも検出され、中でもSX-48からは粗悪な碧玉片が一括出土している。

a 素材①（第8図1～第10図10） 管玉製作の原材となる素材で、形態的には横長で厚手の略長方形を呈する剝片である。前回の報告では横長剝片と縦長剝片のものがあり、それそれをI類・II類としたが、今回は縦長剝片のものが確認されておらず、すべてI類の横長剝片の例であった。このことは縦長剝片の素材は極めて希であり、素材①の形成は横長剝片を作出する工程が主体を占めていたことが予想される。

これら素材①は、剝片の末端に面を取り込んでいる例（2～6・8～9）が多く、打面と下面がほぼ平行になるような盤状の石核から剝離されたものであることが推定される。さらに1は下面を取り込んでいないものの正面は下面からの剝離痕によって構成されており、これにも下面が存在していたことがうかがえる。1と同じように、正面を構成する剝離痕と主要剝離面の打撃方向が180度となる剝離で形成されたもの（3・9）や、正面の剝離痕に上下両方向からの剝離痕が認められる例（2）もあり、素材①の作出は打面を固定することなく、上面と下面双方を打面として利用していることが理解される。また、3～6・8のように打面（4～6・8）や下面（3）が主要剝離面に切られた一枚の剝離面で構成されたものが多く認められ、しかもこの剝離の打瘤部は欠落している状態である。したがって、これら素材を剝離した主要剝離面の形成以前（直前か）に剝離されていることが判断されているとともに、90度の打面転移を加えながら作出される素材①があったことが予想される。そして、主要剝離面の形成は素材を半割りにするような剝離で、確認されなかつたもう一方の剝片には打面や下面を構成する剝離の打瘤部と、この剝離を施す為の打面が形成されていたことが推定される。以上のことか

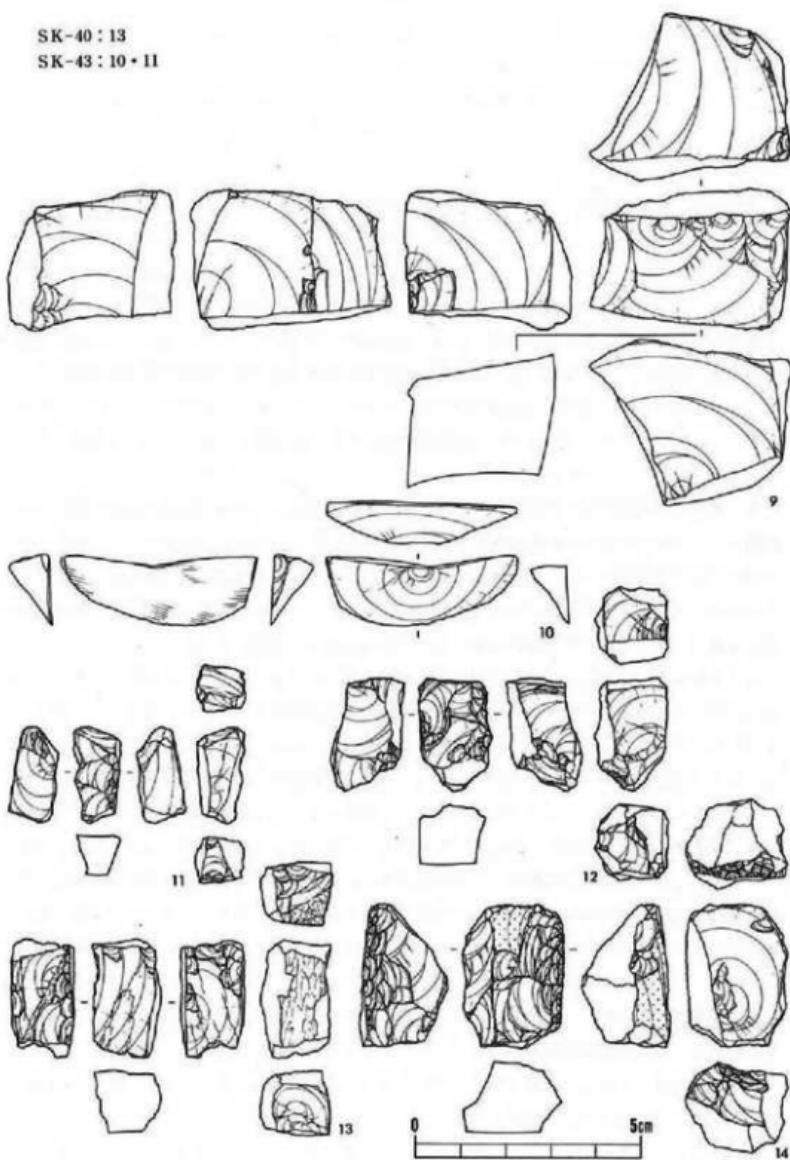


第8図 行駆遺跡F地区玉作関連遺物（素材①）



第9図 行塚道路F地区玉作関連遺物（素材①）

SK-40:13
SK-43:10+11



第10圖 行塚遺跡F地区玉作関連遺物（素材①・素材②）

ら、素材①の作出には、素材が厚手であった場合等に90度の打面転移を複数で行いながら素材の半割りを繰り返すような技術があったことがうかがえる。8～9のような厚手の方形に近い素材は、このような技術の過程で作出されたものであることが推定されよう。なお、7も素材を半割りにしたものであるが、断面は三角形状を呈しておりこれには下面が形成されていたかは明確でない。

素材①は、断面が方形を呈する柱状の剥片が基本形であり、これら1～9の中には長方形(3～4)や方形(8～9)に近いものはあるものの、三角形や不定形の断面を呈するものもあり、後者のような例は素材①作出工程内で生じた扱い物であった可能性が高いことが理解されよう。そして、通常では素材①に調整を加えて後述する素材②を作成し、これに研磨を施す未製品①という工程となるが、今回の資料の中には素材①作出段階と考えられる例(10)の中に、研磨面を持つものが確認された。ただ、10は多くの管玉製作関連遺物が碧玉を原材とするものであるに対し、極めて軟質の凝灰岩を原石とするものであり、研磨そのものは容易であったことが理解されるため、素材①の作出段階に研磨技術を先取りするようなことがあったことが推定されるものと思われる。

b 素材②(第10図11～第11図16) 素材①に調整を加え、より良好な角柱状の状態にする段階で、この時点での両端に調整を施して素材②と最終形態の管玉の長さがほぼ決定される。11～14は比較的小形であるが、15～16は大形の例である。これらは素材①の段階で、平坦な面として形成されている主要剝離面や打面には調整を施していないものが多く、調整の主体は剝離面や上面と下面を構成する両端に集中する傾向があることが理解される。

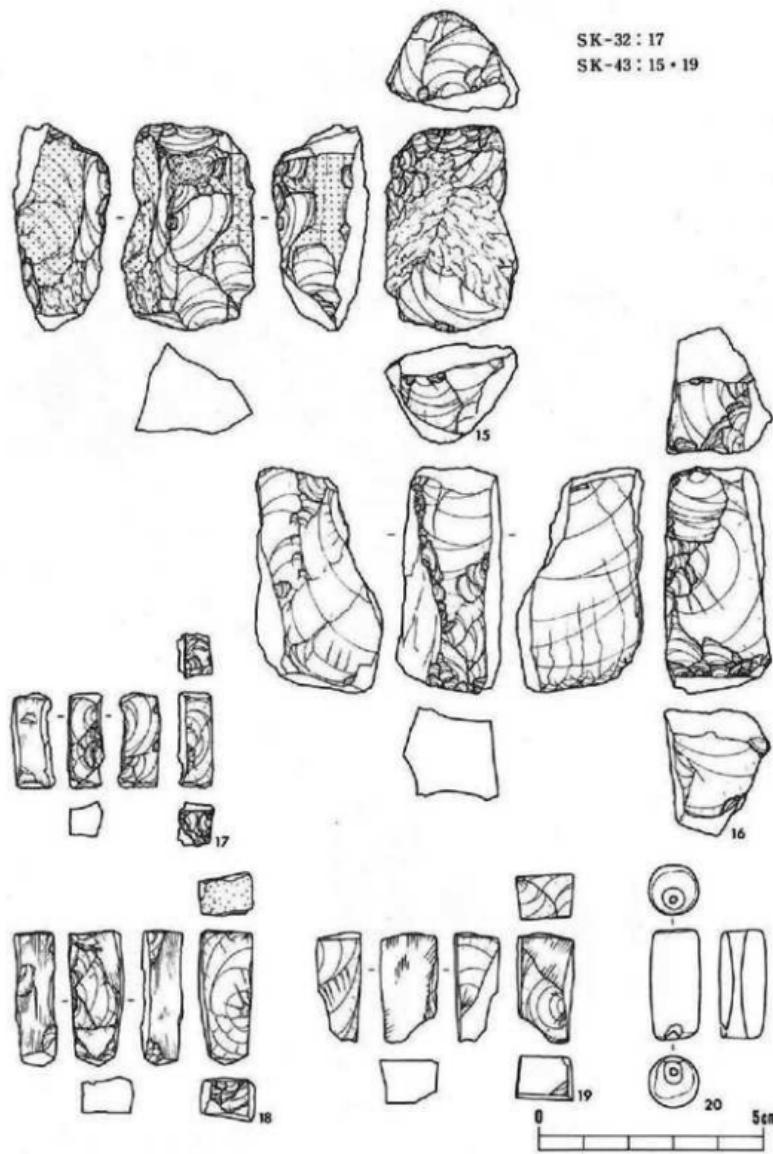
c 未製品①(第11図17～19) 角柱状に調整された素材②に対して、研磨を加えていく段階である。この段階の研磨は、角柱状に調整された素材②の形状をいかして加えられており、4面で形成される角をおとすことなく、あくまでも各面の研磨が優先されている。この段階においても主要剝離面の研磨は後回しにされており、主要剝離面の形状は管玉製作工程の中にあって重要な位置を占めていたことが予想される。17は上面の一部にも研磨が認められる。

d 未製品④(第11図20) 角柱状の未製品①に研磨を加え、多角柱状になる未製品②と略円形の断面を呈する未製品③を経て、穿孔が加えられた段階のものである。形状は管玉状となり、長さ24.3mm、径10.8mmを測るが、穿孔は中央でなく片寄って施されており、やや径が太いことからも研磨を続行させることによって孔を中心位置させるものと思われる。穿孔は、上下両面から加えられている。

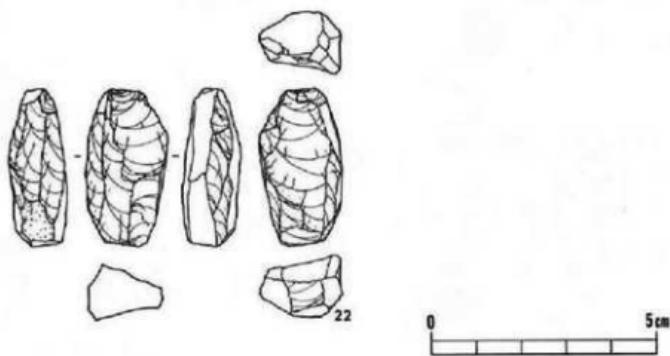
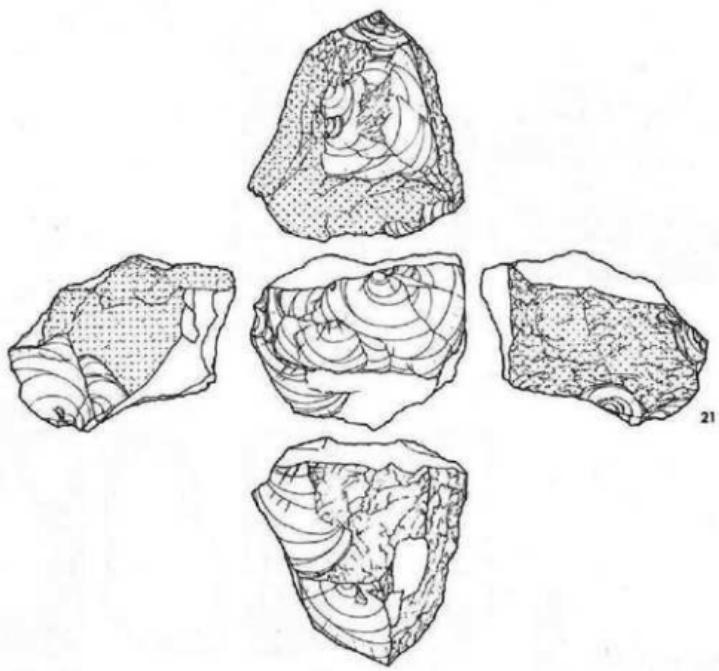
e 石核(第12図21) 素材①を作出した石核と考えられるもので、礫の上下に平坦面を形成し、正面と裏面に剝離を加えたものである。やや厚みがあり形状は整ったものではなく、上下面の調整剝離と素材①の剝離と考えられる正裏面の剝離以外は、著しい調整を施した痕跡は認められず、両側面は礫面で構成されている。

f ピエス・エスキュー(第12図22) チャート製のいわゆるピエス・エスキューである。左側面の一部に礫面を残すが、これ以外の面はすべて上下方向からの剝離痕で占められている。

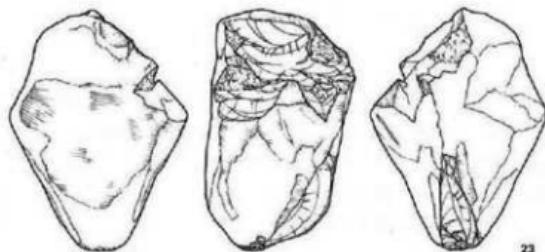
SK-32:17
SK-43:15・19



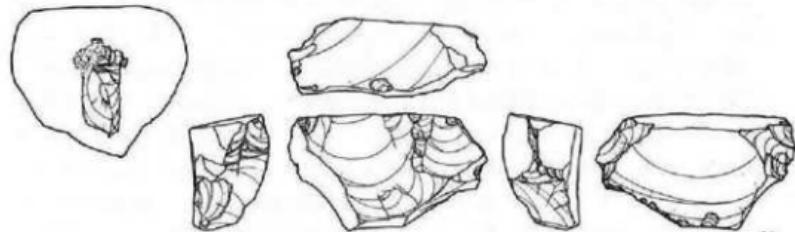
第11図 行塚遺跡F地区玉作関連遺物（素材②、木製品①・④）



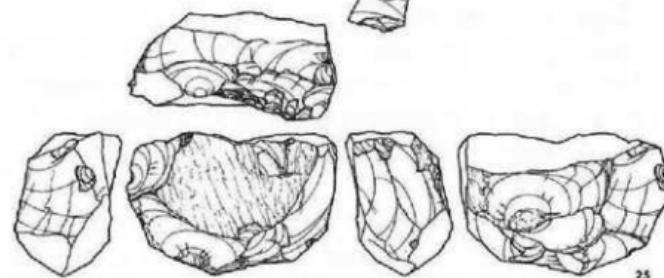
第12図 行塚遺跡F地区玉作関連遺物（石核、ビエス・エスキー）



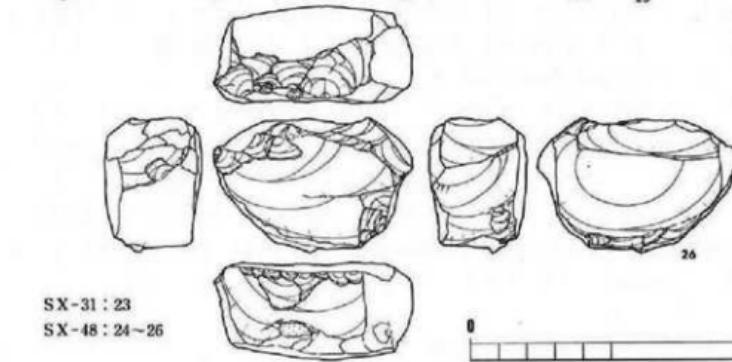
23



24



25



26

SX-31: 23

SX-48: 24~26

0

10cm

第13图 行塚道路F地区玉作陶遗物（磨石+敲石、磨玉材）

ただ、上端は刃部状を呈するものの、下端は面形成されており、通常のピエス・エスキューとは相違が認められる。

g 磨石+敲石（第13図23） 極めて石灰岩と考えられる礫に、磨面と敲打痕及び敲打による剝離が認められるものである。敲打痕は礫の下端の突出部に、磨面は正面と両側面及び上半の欠損面（剝離面？）に観察されるが、後者は礫の角や突出部分に認められており、礫の凹み部には達していない状態である。したがって、磨石としての利用はあまり頻繁なものでなかったことが推定される外、手持ちの砥石として使用されたものがあったことがうかがえる。

h 碧玉（第13図24～26） SK-48から一括出土した碧玉片の内3点を図示した。63点確認された中で調整が加えられた可能性の高いものを図化したが、これ以外のものは自然面によって構成されたものは少ないにもかかわらず、各面は弱いリングが観察できるものの打撃による明確な打点及び打瘤を持つ剝離面と考えられる面で構成されたものは極めて少ない状態にある。しかも表面はやや風化し赤化したものも見受けられており、石質自体が劣化した状態のものが大部分を占めていた。そして剝片状に割れたものの中には、打瘤を持たず表皮を剥いたような状態で剝片化しているものも認められ、打撃による剝片化とは異なった状況を示すものもあった。さらに一括出土であることから多くの接合が期待されたが、少數の接合が確認されたにとどまり、同一の個体であっても接合する状態にないものや、同一個体でないものが多いことが推定された。以上のことから、これら一括出土した碧玉の大多数は打撃以外の火力等の何らかの力によって分割されたものであったことが予想されるとともに、それらの一部に調整を加えてはいるものの管玉の素材としては有用性のあるものでなかったことが推定され、しかもこのようなものを集めて一括放棄したものであったことが理解されるものと思われる。

24は、正面の一部と両側面の一部に調整が施されているが、素材の主要剝離面が存在しない例である。25～26は打面部として図示した部分に調整が認められるもので、26には正面と下面にも小さな剝離が存在している。これ以外の各面は、碧玉内存した気泡状の部分より割れ面が生じているもの（25の正裏面）や、打瘤のない剝離面（25の裏面下半、26の右側面）等で形成されている。さらに26の正裏面及び下面は表皮を剥ぐような状態の面となっており、これらの面には打瘤は観察できない状態である。

以上、今回の調査で出土した管玉製作に関する資料や碧玉を概観してきたが、この中にも前回の報告で指摘した白濁面が存在するもの（6・14～15・21）が存在したため、その範囲をトーンで示しておいた。ただ、6は極めて小範囲のためトーンの貼り込みは行わなかったが、正面の一部に認められている。これらの石材は碧玉が主体を占めているものの、他には前述した軟質の凝灰岩（1・10・19～20）の外、硬質な凝灰岩（7）、硬砂岩（9・18）等があり、さらに碧玉の中には緑色のもの以外に茶褐色～黒色に近い色調の例（3～4）も認められ、バラエティが著しい。

3) 玉作関連遺物における若干のまとめ

以上のように、今回の調査でも前回の調査で確認されたように管玉の製作工程を示す資料が

検出され、これらの内容をより深化することができたとともに、幾つかの新しい知見や問題点を加えることができた。ここでは、それらに対して触れ、まとめとしたい。

まず一つ目は、前回と今回の調査の中で多量の碧玉等の石材、素材、未製品等、一連の管玉製作に関する資料が検出され、本遺跡が管玉を中心とする玉造集団の生産遺跡であったことが推定される状況にある。ただ、本遺跡では玉造にかんする資料の内、素材等の原材料の部分は充実しているが、工具や砥石等の作業過程で利用する器具類の出土量は少なく、全体的な作業内容を明確に捉えることができない状態にある。それは、調査がガス管などの埋設に伴う事前調査であるという制約上、面的な調査によるものでないという一因があり、このような状況は玉造関連資料と構造との関係や遺跡の集落構造を明確にできないという原因ともなっており、本遺跡の性格や内容が確実に捉えられない障壁となっている。このような中で、今回の調査においてビエス・エスキューが確認されたことは、本遺跡の南西約1kmに所在する弥生時代の玉造遺跡である下谷地遺跡との関係の上で、検討課題が提示されたこととなった。それは、下谷地遺跡の論考（斎藤1983）の中でビエス・エスキューをたがねとして評価し、素材の分割に利用されたことが推定されている。行塚遺跡は古墳時代初頭に比定される遺跡であり、前回の報告でも指摘したとおり下谷地遺跡とは管玉製作工程に相違があり、技術的にも時代的にも関連性を追求できる状態になかったが、本遺跡からも玉造遺跡でたがねとして評価されたビエス・エスキューが出土したことは、下谷地遺跡と技術的な関連性を暗示させる物証が確認された事に他ならない。ただ、現在までのところ確認されたビエス・エスキューは1点だけで、しかも玉造関連資料とは明確な関係は捉えられていないため、時期的な内容を含めて今後に残された課題として認識しておく必要があるものと思われる。

また、今回の調査で確認された素材の中には、2~3回の90度の打面転移を行って作出されたものが存在した。前回の調査においても少量確認されI類bの素材として評価したものであったが、今回の資料をみると見過ごしきれない量を作出していることが予想される。したがって、盤状の石核から180度の打面転移を伴って作出される素材（I類a）とともに、素材を形成する技術として確立されたものであったことが推定されよう。

このように、行塚遺跡は管玉の生産遺跡としての性格をもつ遺跡であることが推定されるが、前述したように隣接する位置には、弥生時代中期の玉造遺跡である下谷地遺跡が所在し、しかも本遺跡の周囲にも管玉の未製品や碧玉を出土した吉井水上II遺跡、野附・萱場遺跡が確認されている。したがって、本地域は集落を超えた玉造の生産地域であったことが推定され、今後は各遺跡の時代的な背景を加えた玉造地域の内容が捉えられ、製作された玉類の流通地域や碧玉の原産地の同定等も積極的に解明していくなければならないものと思われる。

2. 平安時代の遺物

当該期の遺物は、土師器・須恵器を主とする土器類のほか、砥石（第14図58）が1点出土している。遺物量は概して少なく、土師器が磨減細片が多いこともあって、須恵器が目立ってい

る。以下、土師器・須恵器について概観する。

1) 土師器（第14図28～33）

確認された器種は、長胴の甕・無台环・有台环であり、小形甕が存在する可能性は高い。図化できたものは僅かであるが、以下概略を器種別に述べたい。

坏 類（28～30） 破片が小さく、全体をうかがえる個体がほとんどない。1の無台环は、口唇部を若干欠損した破片から実測したものである。底径は6.6cm、口径約10.0cm、器高約2.7cmで、大きさ自体はかなり小形化している。全体にやや厚手を呈し、底部内面中央が突起状をなしている。調整は、外面ロクロナデで、底部外縁には糸切り痕が認められる。ロクロナデは、外面は不明瞭であるが、内面は細かくほりの深いナデ痕を残している。2は、糸切り痕が認められる無台环の底部である。底部内面には、29と同様に突起状をなし、ミガキ状の丁寧な調整が観察される。30は、土師器では珍しい高台が付く有台环である。高台は台形状をなし内接する。焼成は不良で、橙色を呈する。形態は、佐渡小泊系須恵器の模倣と考えられるが、類例が少ないと、小片のため全形をうかがえないことなどで、確かにところは不明である。

甕 類（31～33） 破片数は多いが、磨滅と細片化のため器形等を示せない。口縁部は緩やかなくの字を呈し、口唇部は面取りがなされやや肥厚している。体部は須恵器と同様のタタキ痕・アテ痕が認められ、ススが付着している。

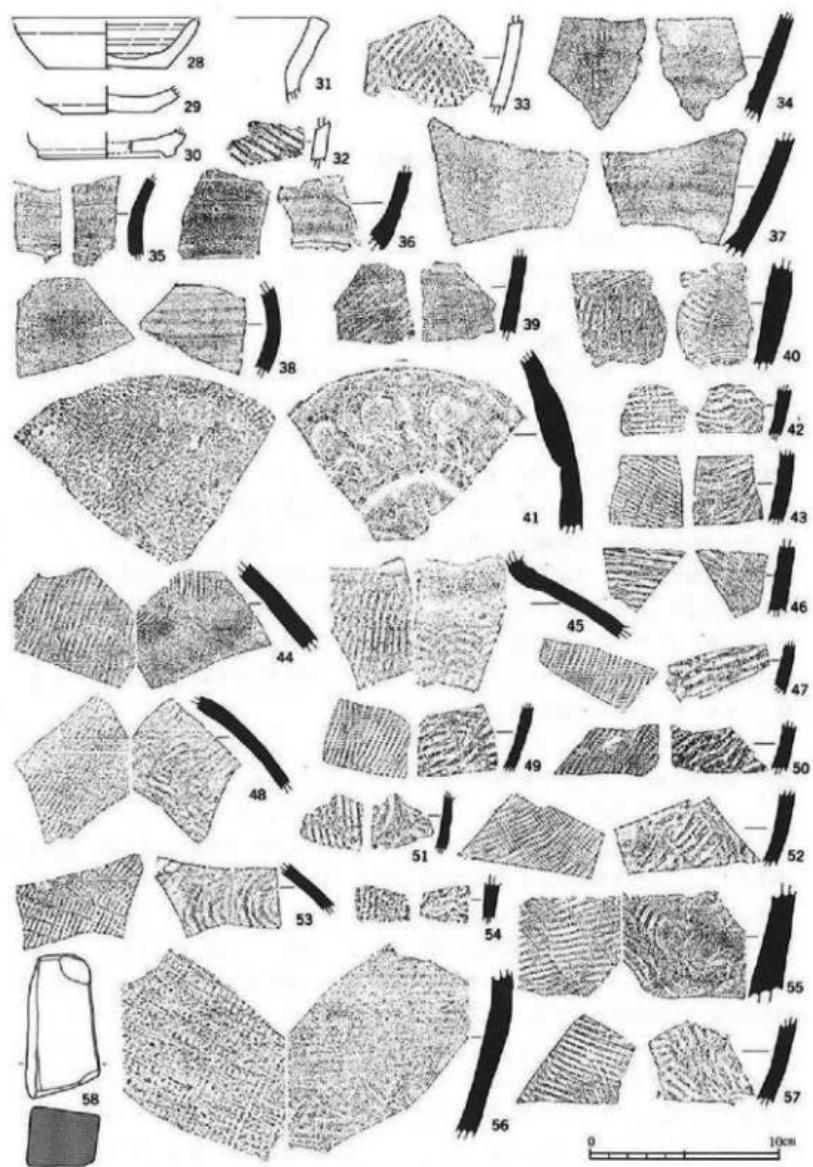
2) 須恵器（第14図34～57）

須恵器の器種は、甕類が大半を占め、次いで壺類、そして若干の横瓶が認められる。坏類は、排土採集品で無台环の小破片1点が唯一であった。第2次調査では、無台环は数個体検出され、また縦軸小破片も認められていたが、本遺跡の器種組成や構成の一端がここに示されている。

壺 類（34～38） 35が頸部から口縁部にかけての破片、38が同部上半部、36が底部付近の破片であり、これらから頸推すれば口縁部が長く外反しながらのび、肩部が丸い長頸瓶が想定可能である。破片数からして、個体数はそれほど多くはない。なお、37は、壺胴部には間違いがないが、ロクロナデ以前に格子目のタタキがなされた痕跡を残している破片である。

横 瓶（41） 体部の側面部の破片である。全体の形状等は明らかにできない。破片は、この1点であり、個体数はかなり少ないものと思われる。

甕 類（39～40・42～57） 土師器は磨滅が著しく、復原及び図化が困難なのに対し、甕類はそもそもその個体が大形で破片数が多くなることと、磨滅化が顕著ではないことから図示した破片数が多い。しかし、器形等をうかがえるものはなく、すべて破片資料である。成形痕・調整痕から若干特長について述べておく。第3次調査でも表採品としてハケ調整痕をとどめる横瓶の破片を報告したが、今回は甕類の破片にそれが確認されている。それは、39・40の2片で、ともに内面に認められ、40の場合アテ具痕も認められる。その他では、外面のタタキ目痕が粗い格子目のものと、繊細でカキ目が施されるものが目立ち、内面ではアテ具の溝の彫り込みが浅く不明瞭となったアテ痕などが認められる。また、44は微弱なアテ具痕を指頭によりすり消しているものである。



第14図 行塚道路F地区平安時代土器類・砥石 (1:3)

V 総括

1 古墳時代前期における行塚遺跡の意義

本遺跡第一の意義は、玉造集落の可能性が高いことである。今回のF地区と第2次調査のC地区を合せれば、玉作関連の資料は600点ほどとなる。しかし、調査範囲が狭いこと、資料数が少なかったこと、工房址が未検出などから、詳細を明らかにできるまでには至っていない。また、県内において管玉等の製作工程が復原されている事例は、弥生時代中期後半の下谷地遺跡と佐渡・新穂玉作遺跡の2例がある。行塚遺跡についても、昭和59年に実施したC地区的調査成果として、管玉の製作工程についても復原を試みている。しかし、新潟県におけるこれら研究は、全くと言ってよいほどに停滞しており、弥生時代と古墳時代の技法的な検討も充分になされていないのが現状である〔寺村1986〕。行塚遺跡の資料は、僅か150m²に満たない調査区から出土したものであった。玉造集落の規模については明らかではないが、製作工程を知ることのできる資料が得られている事実は、本遺跡での玉造りを如実に示している。本項では、行塚遺跡を玉造集落と積極的に位置付け、その意義について述べることとした。

出土土器群の編年観 当該遺跡においてなされた玉作の時期については、C地区出土土器群によって古墳時代前期の所産であるとしている〔柏崎市教委1985a〕。しかし、弥生時代と古墳時代の時代区分をどの段階で区切るのかと言う問題が全く解決されておらず、当該資料の編年的な位置付けを不明瞭なものとしていた。近年において、当該期の土器編年の作業もかなり進展しており、この問題から述べておきたい。

当該期の土器編年については、既存資料からすれば既に大まかな流れが把握されており、それらの総括的な編年試案も示されている〔品田1992〕。この編年観がどの程度支持されるのかについては不明であるが、この試案による編年的な位置付けを行っておきたい。まず、若干の概略を述べると、弥生時代の終焉を高地性集落までとして、以後を古墳時代と考える。前期は、畿内系の高坏・小形丸底壺が流入する段階を画期として前半期と後半期に大きく2分され、前半期（第I期）は4段階、後半期（第II期）は3段階に細分することができる。前半期は、北陸色が強い後期の土器様相を強く継承し、後半期はそれが抜きされる過程である。

行塚遺跡の土器群は、その様相からすれば時期幅はかなり限定されていると考えられ、その特色は北陸色を比較的の良好に残し、畿内系を特徴付ける土器群が存在しないことなどから、大まかには前半期に属することになる。本遺跡の土器に認められる特徴は、甕類では口唇部に明瞭な面取りが施され、またやや摘み上げたような口唇部形態が多いこと、壺類では北陸系の二重口縁壺が認められる。しかし、甕類には有段の二重口縁形態はほとんどなく、C地区で唯一1点の破片が出土している程度である。この二重口縁甕は、第I期でも前半段階を特徴付ける存在である。したがって、本遺跡の少ない資料からではあるが、これら土器群の編年的な位置

付けを試みれば、前期前半期の後半に相当することになる。県内においては併行する土器群としては、緒立遺跡第2号住居址〔黒崎町教委1983〕、刈羽太平遺跡第IV地区出土土器〔柏崎市教委1985b〕などを掲げることができる。また、北陸地方における南加賀地域の編年では、漆町7~8群土器におおむね対比されると思われる〔田島1986〕。

玉造集落と古墳群 行塚遺跡において玉造がなされた時期は、前期前半期でも後半と考えることができる。新潟県における玉作は、弥生時代中期後半の下谷地遺跡〔新潟県教委1979〕、後期の前半から後半にかけてでは糸魚川市・後生山遺跡〔糸魚川市教委1986〕が知られる。しかし、古墳時代前期については、三条市・館遺跡などが存在するが、資料的なまとまりが認められる事例が少なく、実態等は全く把握されていないのが現状である。したがって、玉造集落として、また玉作の製作工程を示す資料が出土している遺跡として、行塚遺跡の意義は大きいのである。

さて、本県における玉作は、糸魚川市域の弥生時代後期では住居状の堅穴を工房址とした玉作がなされるが、中期後半の下谷地遺跡では明確な工房址は検出されていない。行塚遺跡の場合、SK-43が住居址の可能性があるが、確認には至っていない。しかし、C地区の調査成果では、住居址は確認されず、屋外と思われるところにビットや土坑があり、その覆土内から多くの碧玉が出土しているのである。特に、SKp-13からは砂質粘土が検出されており、何らかの工作用のビットである可能性が持たれている。このような状況は、下谷地遺跡や後生山遺跡の事例とは異なっており、製作に係わる工房等はかなり相違しているのではないだろうか。

行塚遺跡の裏山には、前方後円墳1基と円墳もしくは前方後円墳と考えられる古墳1基の計2基の古墳群が確認されている〔柏崎市教委1989〕。玉造遺跡である行塚遺跡の意味を考えれば、密接な関連が想定できるのではないかだろうか。ただし、この吉井行塚古墳群は、測量調査のみで発掘を一切行っていないため、時期及び副葬品等については全く不明である。しかし、行塚遺跡における存続時期は概して短いと予想され、それが玉造と古墳の造営に係わる存在である可能性は高いのではないだろうか。行塚遺跡と古墳群との時期的な関係が密接と仮定すれば、少なくとも2基の内1基の時期がおおむね想定されることになる。これらについては、ほかの事例の検討や類例を期待し、今後の課題としておきたい。

2 平安時代の行塚遺跡

平安時代における行塚遺跡の実態は、調査区の狭小により遺構を良好に確認できること、出土した遺物には一括的に把握できる資料がないこともあって、詳細な点は不明とせざるを得ない。ここでは、C地区出土遺物及び検出された遺構を含め、本遺跡の意味について若干のまとめをし、今後の調査等への足掛かりとしたい。

年代的な位置付け 本遺跡から出土した遺物は、土師器と須恵器を主体とし、唯一1点の綠釉陶器が検出されている。土師器・須恵器は、出土量全体としては大差ないように見受けられる。しかし、器種構成には明らかな区分が看取される。土師器の器種は、甕類（特に長胴甕）

を主体に壺類で占められ、須恵器は大甕・長頸瓶を主体に横瓶が認められ、若干の壺類（無台壺のみ）が伴っていた。土師器壺の汎用量は小形化の傾向がうかがえ、須恵器は大半が佐渡小泊系の製品と考えられる。須恵器壺類は、焼成がやや甘くなり、口縁が大きく外傾して浅い形態のもので占められている。小泊窯では、壺類の生産は10世紀前半で終息し、壺類専業窯へと縮小するとされている。したがって、本遺跡の年代的な上限は、ほぼ10世紀前半頃、さかのぼっても9世紀後半とすることができ、中心的な時期はおおむね10世紀代が想定できる。

集落成立の意義 このような時期に成立する集落は、堀建立物址（含倉庫）・井戸・土坑・畠などで構成され、これを一単位として一定の区画からなる「宅地」を所有、農業的にも自立した単位となるものであり、「王朝国家（型）村落」として「律令（型）村落」とは区別される村落形態である〔坂井1989〕。行塚遺跡は、このような「王朝国家（型）村落」である可能性を充分保有している。ただし、遺構として把握できていないことは、今後に残された課題でもある。

吉井遺跡群内では、建物址・畠が検出された同時期の遺跡として戸口遺跡が存在する。行塚遺跡とは、湿地を介して分断された状況にあるが、近接して同じような集落が存在することは、当時の集落景観あるいは耕地との係わりを見極めていく上で重要である。今回は、紙幅の関係で詳しく述べる余裕はないが、頸城平野では一口遺跡において条里型地割に沿うように「宅地」が連続するという状況が検出されている。柏崎平野の場合、地理的な環境が大きく相違していることから、頸城平野とは異なる展開が予想され、当該地域での独自の解明がなされなければならないことを示唆している。

行塚遺跡の意味するところは、古墳時代前期においても、また平安時代においてもその意義は大きく、今後更に検討が進められなければならない遺跡と考える。余りに描いてしまったが、御批判・御教示等を乞う次第である。

〈引用・参考文献〉

- 糸魚川市教育委員会 1986『後生山遺跡』（糸魚川市埋蔵文化財報告第13輯）
伊藤恒彦 1985『行塚遺跡出土の玉造り関連遺物について』『吉井遺跡群』（柏崎市埋蔵文化財調査報告書第4）
柏崎市教育委員会
柏崎市教育委員会 1985 a『吉井遺跡群』（柏崎市埋蔵文化財調査報告書第4）
柏崎市教育委員会 1985 b『胡羽大平・小丸山』（柏崎市埋蔵文化財調査報告書第5）
柏崎市教育委員会 1989『吉井行塚古墳群』（柏崎市埋蔵文化財調査報告書第10）
柏崎市教育委員会 1990『吉井遺跡群II』（柏崎市埋蔵文化財調査報告書第13）
黒崎町教育委員会 1983『総立遺跡発掘調査報告書』
斎藤基生 1983『新潟県柏崎市下谷地遺跡における細形管玉の製作工程について』『人間・遺跡・遺物—わが考古学論集第一』文獻出版
坂井秀弥 1989『古代聚落としての山三賀II遺跡』『新新バイパス関係発掘調査報告書（山三賀II遺跡）』（新潟県埋蔵文化財調査報告書第53集）新潟県教育委員会
品田高志 1992『越後における古墳時代土器の変遷II—前期土器編年による現状と編年試案—』『柏崎市立博物館館報』No.6 柏崎市立博物館
田島明人 1986『塗町遺跡出土土器群の編年考察』『法津遺跡I』石川県立埋蔵文化財センター
寺村光晴 1986『玉作と祭祀』『新潟県史 通史編1 原始・古代』新潟県
新潟県教育委員会 『北陸自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書（下谷地遺跡）』（新潟県埋蔵文化財調査報告書第19）

行塚遺跡



a. F地区遠景

(西から)



b. F地区近景

(西から)

行塚遺跡



a. F地区トレンチ南半全景

(北から)



b. F地区トレンチ北半全景

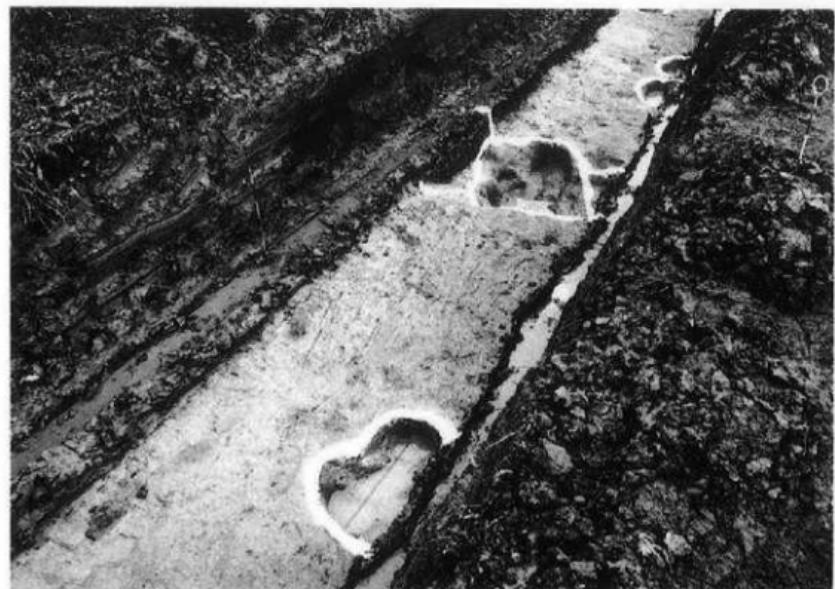
(南から)

行塚遺跡



a. F-2~3 グリッド遺構群

(南から)



b. F-4~5 グリッド遺構群

(北から)

行塚遺跡



a. F-4~5グリッド遺構群

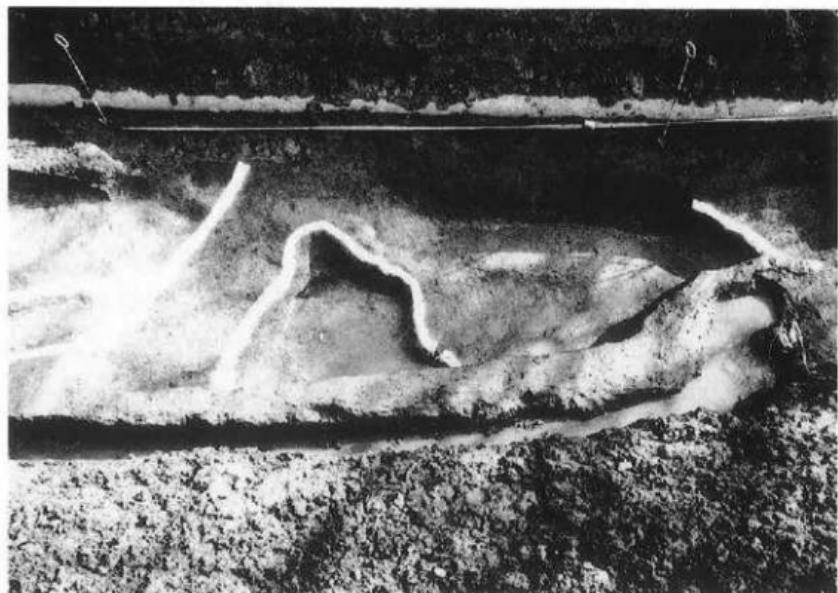
(南から)



b. F-5グリッド遺構群

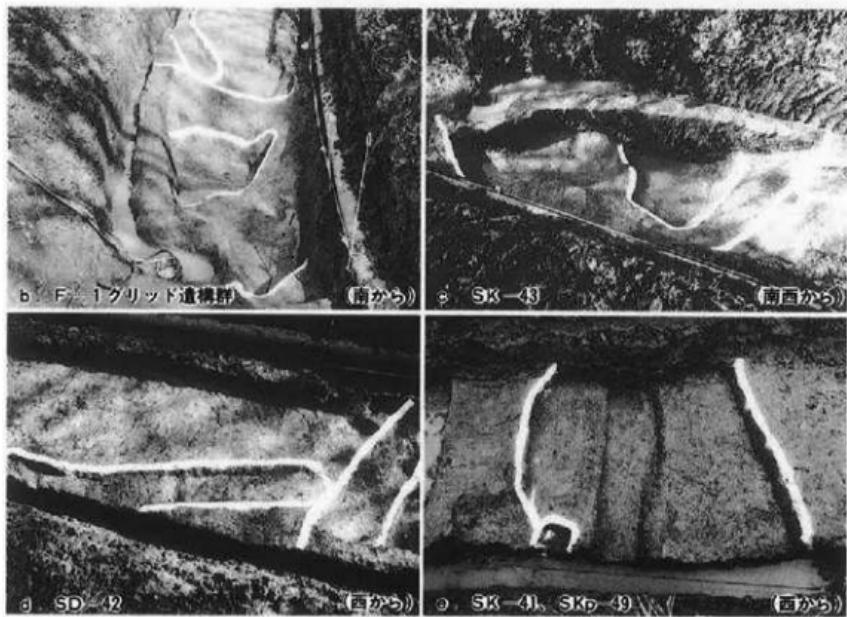
(南から)

行塚遺跡

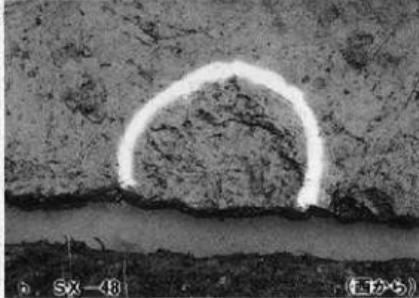
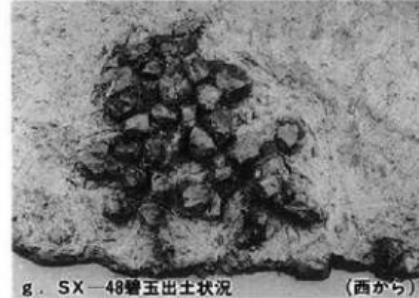
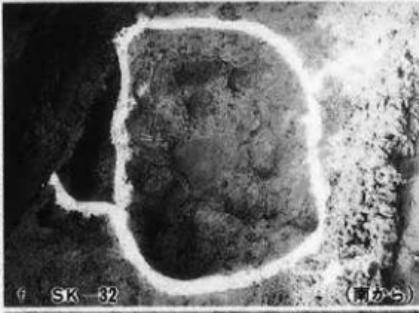
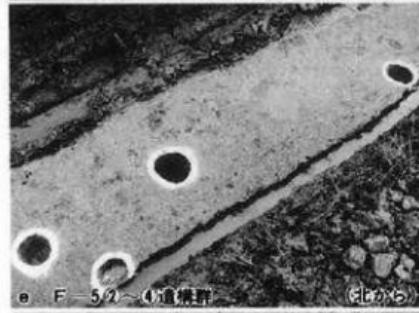
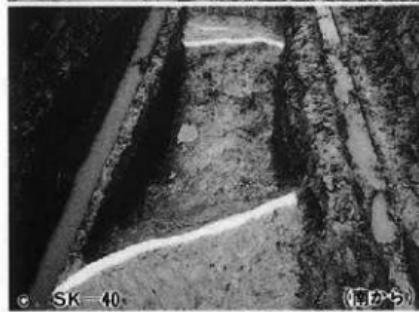
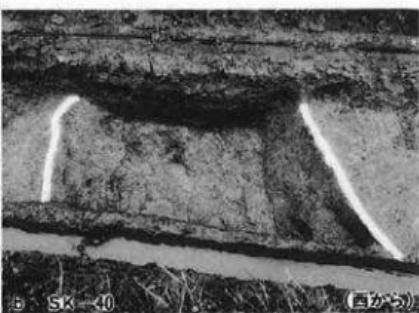


a. SK-43

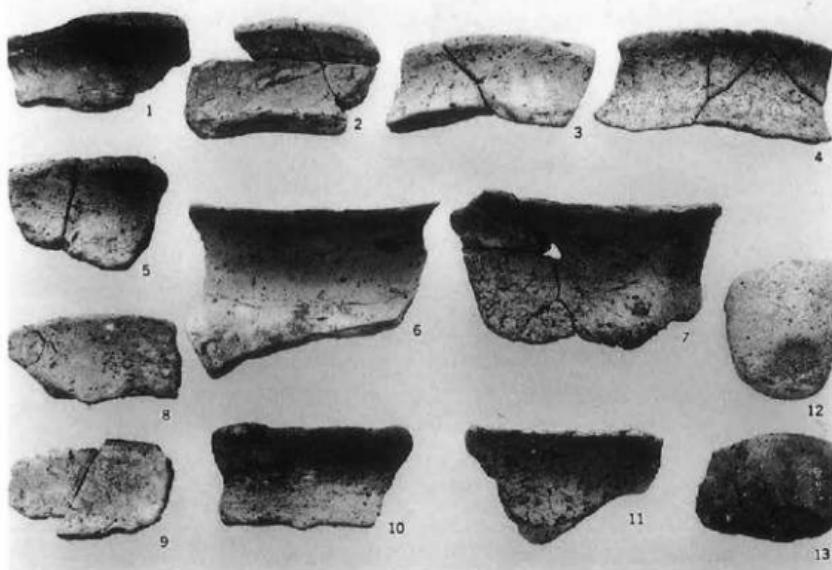
(西から)



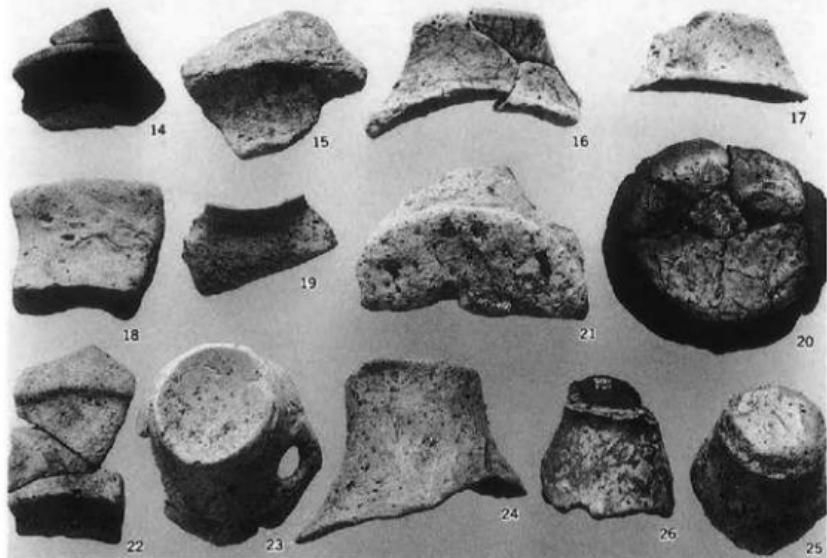
行塚遺跡



行塚遺跡

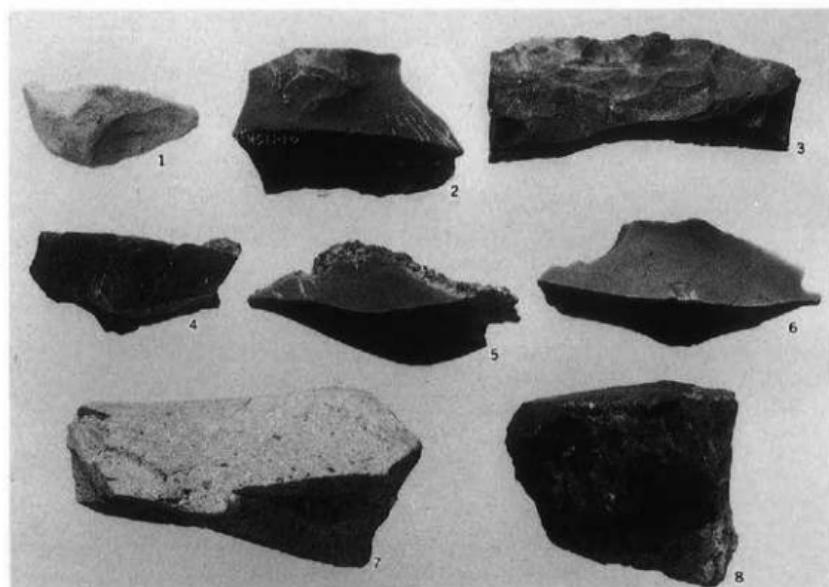


a. 前期古墳時代土器 1



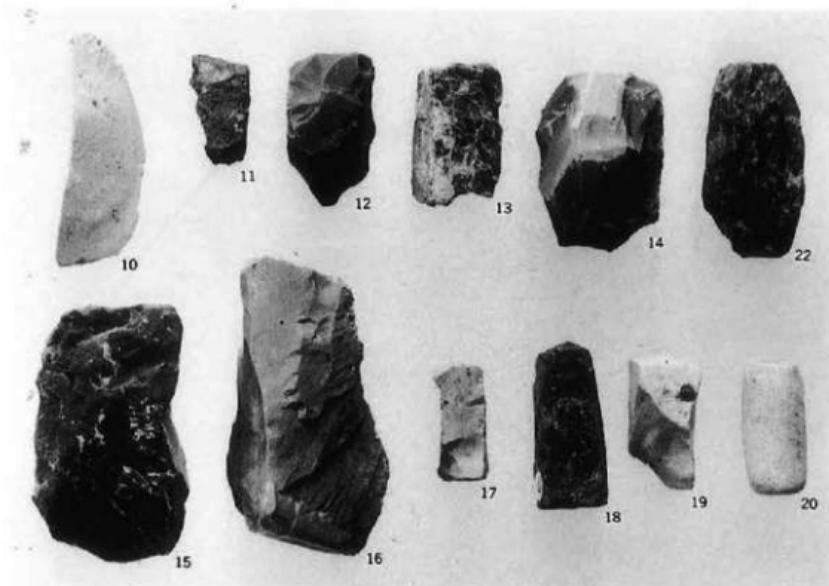
b. 前期古墳時代土器 2

行塚遺跡



a. 玉造関連遺物 1

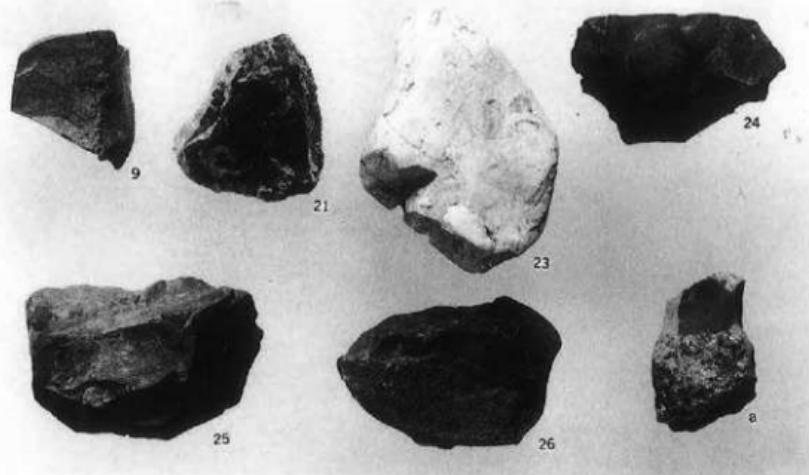
(約 1 : 1)



b. 玉造関連遺物 2

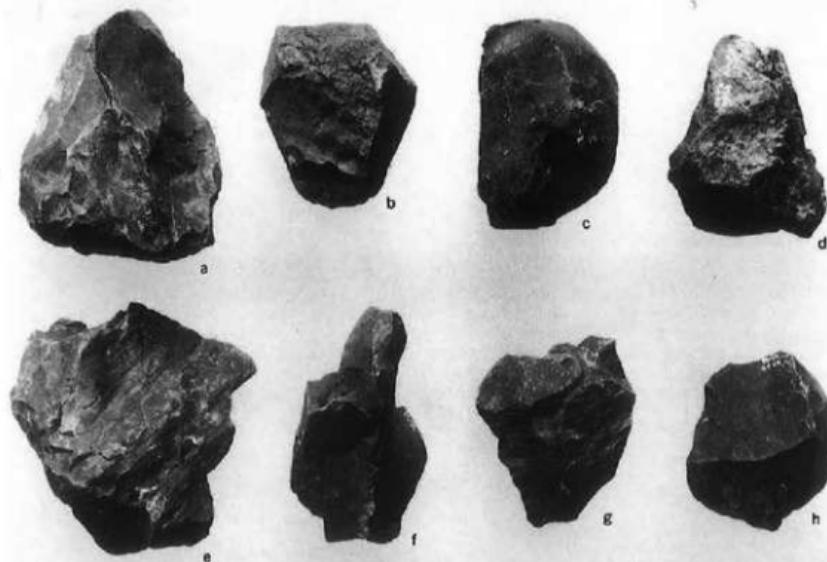
(約 1 : 1)

行塚遺跡



a. 玉造間連遺物 3

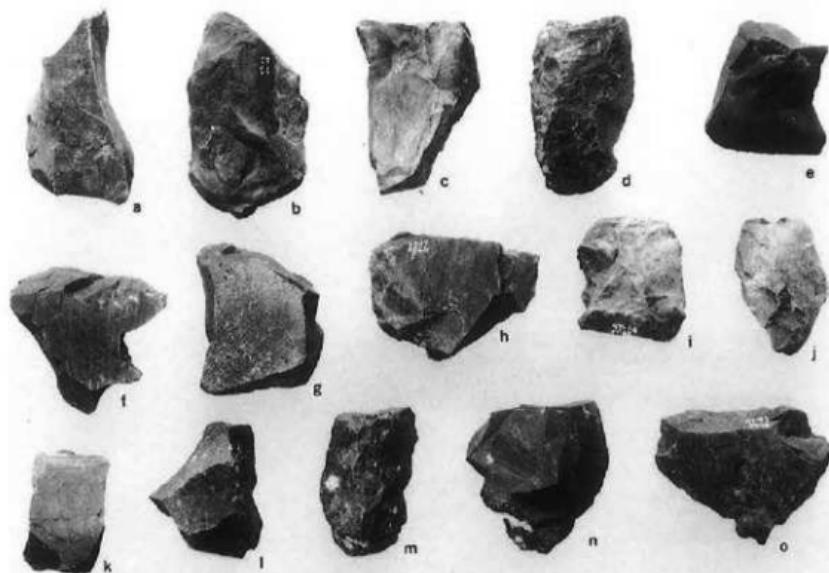
(約1:2)



b. 玉造間連遺物 4 [SX-48]

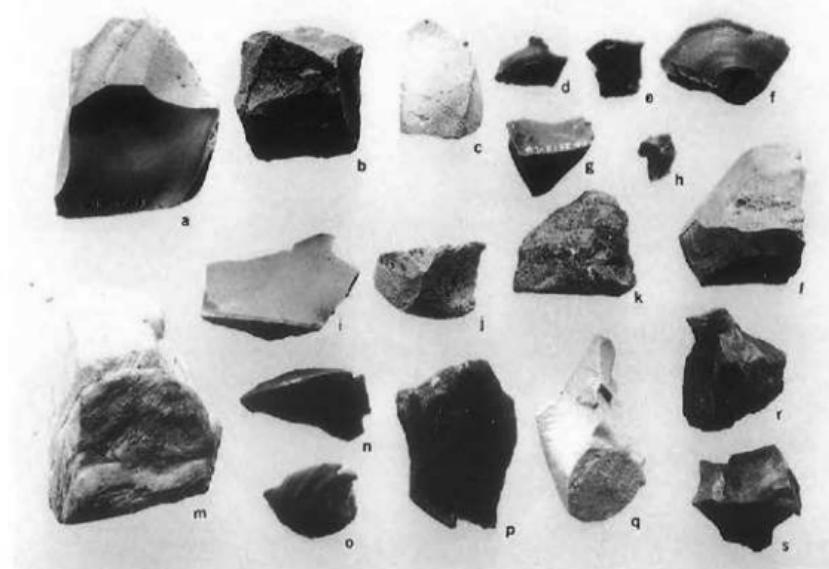
(約1:2)

行塚遺跡



a. 玉造間連遺物 5 [SX-48]

(約1:2)



b. 玉造間連遺物 6 [SK-48]

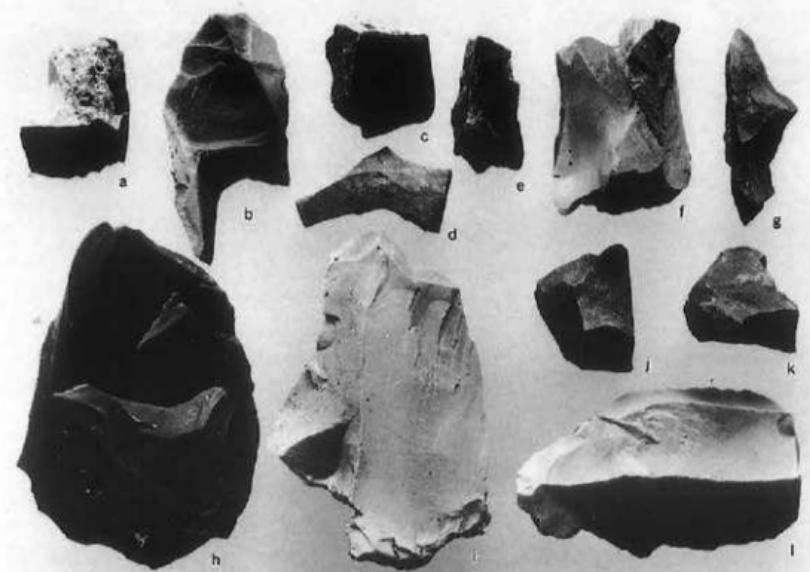
(約1:2)

行塚遺跡



a. 玉造間連遺物 7 [SK-40]

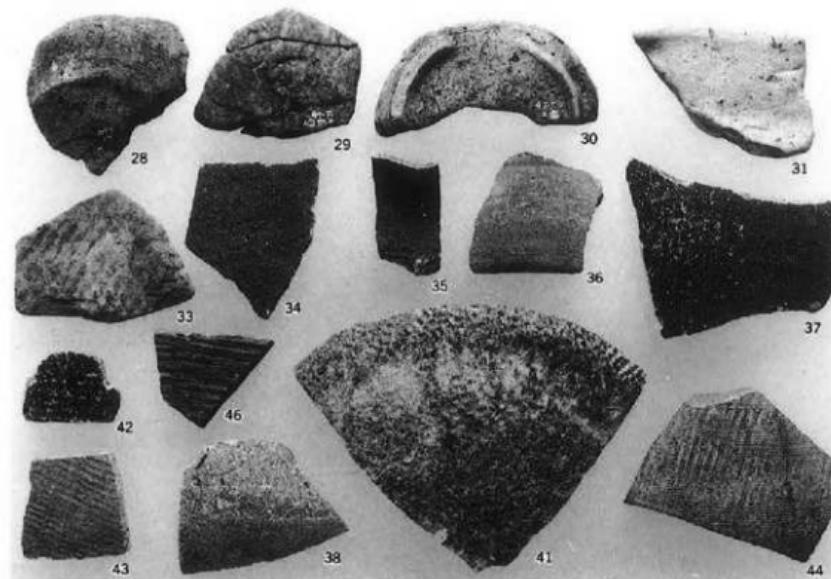
(約1:1)



b. 玉造間連遺物 8

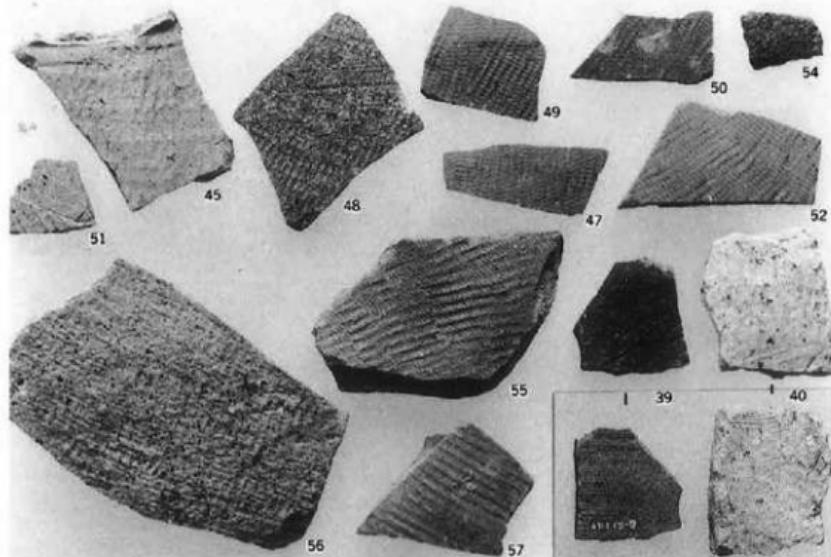
(約1:1)

行塚遺跡



a. 平安時代土器 1

(約 1 : 2)



b. 平安時代土器 2

(約 1 : 2)

柏崎市埋蔵文化財調査報告書第17

行塚遺跡

—柏崎市・吉井遺跡群行塚遺跡第4次発掘調査報告—

平成4年3月31日 印刷

平成4年3月31日 発行

発行 柏崎市教育委員会
新潟県柏崎市中央町5-50

印刷 三秀社